

日  
間  
瑣  
錄

大正十四年十月上浣起筆



特別  
14  
1919  
376



日間瑣録

大正十四年 九月 一日起書

昨日例のこころ圖書を漁り左の二書を得た

小山林を畫する畫記 二冊

米屋の少山小を同録 荒干あり其  
の跡の畫の模本を収め各本を考  
証を附す 是れ多く流布本ありた  
人の知る不き此の書本と即ち考証  
の稿本とし米屋自筆とす 小菊版  
小本より縦横の異あり 欄心と小山林



筆子龍端川 在好人佳

庭の亭瓢都京

を」と刻す、女字の細字うんとも流石  
又美多し、余前日万葉為華譜  
の稿本を得たり、こゝに米唐自筆の  
稿を以て米唐花巻譜の初稿と見  
べきことあり、保を以て花巻とすし

○未だの人兵庫に武庫郡本山村安東忠治印  
より余が遺著、秋山陽を讀み、  
若らうと褒表辭を記したる後、  
後滿後、勅津の若  
微郷のつき云々の門、  
三者一處つゝ、  
しとあたる

風持征帆潮聲を回、  
吾人難病幸仍在、  
白頭お映雪、  
清内名人多鬼録、  
三更追話別疎松

乙未二月十日

舟抵勅津、  
微郷、  
林田生志

○那村京治の五峯の親戚を  
の家と成るが、  
五峯の親戚を  
を以て、  
梅湖の即其地

生来之痼疾、逐日快癒、喜而賦

不敏然天何況人、死生富貴悉前因、成功雖待

克勤力、收果終歸司命神、范叟有知論後樂、

維摩甫識是前身、半生痼疾漸將癒、宿忘初欣

從此伸、(此詩七日前之作、五分間ヲ筆シテ)

昨夜睡眼不足 (一時間、海下土時起床) 執筆中

腦痛又起、勿之摺筆、

梅湖 揮

先 壽 小生ノ電話ハ 銀、四七九、 聖階ヲ拜候様ニ

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

○換杏新法、一冊天保甲辰漢法家小川權高の  
若才所卷首、其の冊皮元堅糸にて元松の  
房あり、漢醫、胞華を記筆と交遊ありと  
虽也往々漢と興味を感ずることあり、此書の由々  
力益床解魚毒の項下は文化年間豆物三  
津長濱と云海客、河豚魚多く取れり、漁人  
捕り砂上積ちること亦も其法の如きことあり  
時と折雨の候よりし、其鴉鵂の村中の民家に  
巢する益子を捕り喰ふ人、不思儀と思ひし、其  
田舎順と云醫益床の魚毒を解くと云ふことと  
知し此必益鴉鵂の河豚魚と云ふなり、其毒を解

かんが為め、燕子を取喰らふと、憐れ道に自死の  
めを感し、どうぞとあ、〇るおおし、又鼠毒  
の項下し、荒物小漢の蒲士某鼠を食ふと、高し  
一日鼠疾を覺して、その主を、嚙頃刻、こゝ大熱  
を覺し、慄亂し、殆ど死せんと、時、鼠に、この毒  
を、葉破、園中に出、葉木の茎を食ふと、此唾未  
乙病主の抱、毒、早けり、傍人鼠の毒を、食ふと、之  
を、煎、服せしむる、漸く、命の、毒、後、之れを用、て、毒  
毒を、解、す、大い、な、效、あり、と、又、病、の人、治、せん  
と、ある、も、お、お、し、ろ、し、同、に、筋、の、治、か、能、毒、の、項、ある  
と、く、産、滿、の、伊、拔、梅、雪、云、琉、球、の、四、ハ、ブ、と、稱、する、地  
方、結、人、語、を、解、す、土、人、是、を、毒、と、呼、ぶ、逆、の、防、禦、を、也

或、暗、病、家、に、傳、り、し、に、彼、毒、お、不、の、ハ、ブ、能  
誤、七、疔、と、思、ひ、し、や、頭、を、穿、し、是、を、救、す、ま、の、人、毒  
氣、全、身、に、流、し、慄、苦、悶、亂、既、に、死、ん、と、す、時、に、ハ、ブ、能  
一、種、の、毒、を、銜、み、未、だ、死、を、治、する、者、あり、と、家、族  
こ、ん、と、見、て、故、こ、を、有、人、と、見、る、を、標、也、患、家、に、お、る  
一、ある、ん、言、用、禁、じ、の、所、と、し、て、や、る、漸、く、快、復、せ、り  
と、今、世、に、傳、て、能、毒、を、解、する、ハ、ブ、草、即、此  
者、と、す、と、下、等、動、物、か、治、療、の、法、を、知、る、ハ、自、死、の  
例、と、い、ふ、へ、し、以上、ハ、皆、ま、の、例、と、す、ま、し、(四月二日記)  
○江氏本草傳云、物毒の状を云ふと、毒、く、ま、り、云、く、  
桐、子、辛、温、有毒、治、風、寒、濕、痺、滯、氣、傳、度  
山、嵐、瘴、氣、落、其、氣、入、口、不、循、常、度、頃、刻

而周一身令人通體俱快醒能使研久能  
 使醒能使飽以能使踐人次代酒  
 代表終身不厭故一名  
 切苦の妙能を説く善せり  
 〇お華領の阿留に歌作の藝名をつけてやつた因  
 縁は初を令い出て、吹ふから聴くてくんと云いん、  
 厭もえくいま此夜邦樂を三列り、十数者者  
 いろくの女も聴いれ、歌作のすきむはるのか  
 ちの文句の阿阿知るるる夢もきるるるを得ぬた  
 又収ち一紙が、此紙のおさらの紀念物也  
 あり

十月二日記

高砂

三下り  
 高砂やこのうら船に帆をあげて月もろともに出しほのなみのあは  
 ぢの島蔭や遠くなるほのおきすぎてはや住の江につきにけりは  
 やすみの江につきにけり。

かねてより

本調子  
 かねてよりかくごぎ上手どしりながらここの手がしめた唐繻子の  
かいつしか解てにくらしいかかりてたほかくつげの櫛きつと辻占  
 ひくばかりほんにやるせがないわいな。

一 聲

本調子  
 一聲は合月が啼いたか合ほとぎす合いつしか志らむ短夜にまだ寝  
 もやらぬ手まくらや合男ごころはむごらしい合おなご心はさうじや  
 ないかたときあはねばくよくよと愚痴なこといふて合ないて合居る  
 わいな。

濡れぬ先

本調子  
 ぬれぬ先から浮名たつ合すすきは露を戀したふ合ふたりがなかをい  
 ぢわるな合風が邪魔して合ちらちらとおちて恥かし月のかげ。

粹な浮世

本調子

<sup>本調子</sup>年の瀬や年の瀬や水の流れと人の身は留めて止らぬものふが浮世の義理の捨てどころ頭巾羽織をぬぎ捨てて肌さへ寒く竹賣のあしたまたるる寶ぶね。

宇治は茶所

<sup>本調子</sup>宇治は茶所さまざまな中に噂の大吉山と人の氣にあふ水にあふいろも香もあるぬれたごし粹な浮世にやばらしいこちやこちや濃茶の中じやいな。

春雨

<sup>二上り</sup>春雨に合しつぼりぬるる鶯の羽かせに匂ふ梅が香の花にたわむれ合しほらしや合小鳥でさえもひと筋に寝ぐら定めぬ氣はひとつ合わたりやうぐひす主は梅やがて身まま氣ままに成るならばサア鶯宿梅じやないかいなサアサなんでもよいわいな。

八景

<sup>本調子</sup>嗚呼がましくも八景やここに隅田をうつし歌澤邊に生る若草も君にころをつくづくし人目つつみの櫻がり合ふつとお顔を見めぐりて思ひのたけを晴嵐に合いひそそくれて時鳥合なくか中洲に落る鴈合淺草寺の淺からぬ合恵み合尊き鐘の聲合夕日てりそう吾妻橋はし場も縁の渡し舟逢瀬まつ乳に秋の月しのび忍びし戀の淵今宵の首尾の松間さへ合雪のはだへに書殘すおよばぬ筆のあとや先盡ぬなごりや惜むらむ。

戀すてふ

<sup>本調子</sup>戀すてふ身はうき舟のやる瀬なき浪の夜よる漁火のもゆるおもひのくるしさに合消ゆる命とさつさんせ合世を宇治川の綱代木や水にせかれて居るわいな。

淀の川瀬

<sup>二上り</sup>淀の川瀬のアナ氣しきをここに引て登るヤンレ三十石ぶね清きながれをくむ水車合めぐる間ことは合みな水馴竿合さいたさかづきおさえてすけりやようて伏見へくだまきつなよかうしたところが合千兩まつヨイヨイヨイヨイヨイヨイ。

我もの

<sup>本調子</sup>我ものと合思へばかろきかさの雪合戀の重荷を肩にかけ合いもがりゆけば冬の夜の川風寒く千鳥啼く合待身につらきおきごたつ實にやるせがないわいな。

新曲 西行

<sup>本調子</sup>富士の根方にひと夜のちぎり合あしたかへるか西行さん合おつと待ちねゑ待たしやんせ合浮いてかもめの二人りづれ田子の浦わの波まくら。

子の日

<sup>本調子</sup>子の日する野邊に小松のなかりせば合千代のためしに何を引く合君が別れにそで引とめて屠蘇の機嫌ではづかしさ合顔もほんのり紅梅の枝にかしくのまだつぼみ合歌よむ鳥も返歌さえ合口ばしわかき春風に山が笑ふが厭やせぬ。

くせつ

<sup>本調子</sup>苦説して思はせぶりなそら寝入り合奥の座敷の爪ひきがつい中だちでそれなりに亂るる髪につげの櫛合八幡鐘のきぬきぬに合わかれ合どもなや合おくりぶね。

風さそふ

<sup>本調子</sup>風さそふ合音とおもへごもしやまた合思はせぶりに忍ばるる心の内の合眞の闇合とび立つ程に思ふのを合しらぬ振りして寝て見てもとうも寝られぬ戀のくせ。

朝日

<sup>本調子</sup>朝日さす蓬萊山に合鶴舞ふて龜のよはひを尉とうば合苔の岩間にこの花の合かをり床しき若竹の合常磐の松が枝葉をかさねかかぬ目出度春が合すみ。

紀伊の國

<sup>本調子</sup>紀伊の國は音無川のみなかみにたたせ給ふは船玉山船だま十二社大明神さて東國にいたりては玉姫いなりがみめぐりへ狐のよめ入お荷物をつづは合強力合いなりさま合頼めば田町の袖摺が合さしづめ

戀すてふ  
戀すてふ身はうき舟のやる瀬なき。浪の夜よる漁火のもゆるおもひのくるしさに消ゆる命とさつさんせ。世を宇治川の網代木や水にせかれて居るわいな。

淀の川瀬

淀の川瀬のアナ氣しきをここに引て登るヤンレ三十石ぶね。清きながれをくむ水車。めぐる間ことは。みな水馴竿。さいたさかづきおさえてすけりや。やうて伏見へくだまきつなよかうしたところか。千雨まつヨイ。ヨイ。ヨイ。ヨイ。

我もの

我もの。思へばかろきかさの雪。戀の重荷を肩にかけ。いもがりゆけば冬の夜の川風寒く千鳥啼く。待身につらきおきごたつ實にやるせがないわいな。

新西行

富士の根方にひと夜のちぎり。あしたかへるか西行さん。おつと待ちねゑ待たしやんせ。浮いてかもめの二人りづれ。田子の浦わの波まくら。

子の日

子の日する野邊に小松のなかりせば。千代のためしに何を引く。君が別れにそで引とめて屠蘇の機嫌ではづかしさ。顔もほんのり紅梅の枝にかしくのまだつぼみ。歌よむ鳥も返歌さえ。口ばしわかき春風に山が笑ふが厭やせぬ。

くせつ

苦説して思はせぶりなそら寝入り。奥の座敷の爪ひきがつい中だちでそれなりに亂るる髪につげの櫛。八幡鐘のきぬきぬに。わかれ。ともなや。おくりぶね。

風さそふ

風さそふ。音とおもへごもしやまた。思はせぶりに恐ばるる心の内の。眞の闇。どび立つ程に思ふのを。しらぬ振りして寝て見ても。うも寝られぬ戀のくせ。

朝日

朝日さす蓬萊山に。鶴舞ふて龜のよはひを尉とうば。苔の岩間にこの花の。かをり床しき若竹の。常磐の松が枝葉をかさねかかる目出度春が。すみ。

紀伊の國

紀伊の國は音無川のみななかにたたせ給ふは船玉山船だま十二社大明神さて東國にいたりては玉姫いなりがみめぐりへ狐のよめ入お荷物をつぐは。強力。いなりさま。頼めば田町の袖摺が。さしづめこよひは待女郎。仲人は眞崎眞くろな黒すけ稻荷につままれて。子までなしたる。しのだづき。

網

出にけり網は上意を蒙りて羅生門にぞつきにける。折しも雨風はげしき後よりかぶどのしころを引つかみ引戻さんとゑひと曳く網も聞へし武者にて彼のくせものに諸手をかけ。よしやれ放しやれしころが切れるしころ切れるのもいどひはせぬが。たつた今結ふたびんの毛が損じるは損じるは。七つ過には行ねばならぬ。其處へ行かんすりやこち氣に懸る誰じや誰じや鬼じやないもの人じやもの。かぶともしころも入らばこそサツサ持つて來な。

大正十四年十月一日

歌澤松葉會 一週年紀念 大演奏會番組集

於 邦 樂 座



高砂

高砂やこのうら船に帆をあげて月もろともに出しほのなみのあはちの島蔭や遠くなるほのおきすぎてはや住の江につきにけりやすみの江につきにけり。

かねてより

かねてよりかぐさき上手としりながらこの手がしめた唐繻子のいづししか解てにくらしいかりてたばかりつげの櫛きつと辻占ひくばかりほんにやるせがないわいな。

一 聲

一聲は月が啼いたかほとぎすいつしか志らむ短夜にまだ寝もやらぬ手まくらや男ごころはむごらしいおなご心はさうじやないかたときあはねばくよくよと愚痴なこといふてないて居るわいな。

濡れぬ先

ぬれぬ先から浮名たつすすきは露を戀したふふたりがなかをいぢわるな風が邪魔してちらちらとおちて恥かし月のかげ。

粹な浮世

すいな浮世を戀ゆへにやほにくらすもこころから梅が香そへる春風に二枚屏風を合おしへだておぼろ月夜のうすあかりのびあひほれの口舌の床のなみだあめ池の蛙も夜もすがらしんになくではエエないわいな。

玉川

玉川の水に合さらせし雪の肌合つる口舌のそのうちに合どけし島田のもつれ髪合おもひださずに合わすれづにまた來る春を合まつぞへ。

捨小舟

戀の港の身は捨小舟寄邊もなみのうきふしに追分おしよろ高島およびもないが合せめて歌棄磯谷まで合ところありそになく千鳥合しほらしいではないわいな。

夕立

夕立や田を見めぐりの神ならば合かさい太郎が洗ひ鯉合ささがかうじて孤けん合ほんに全盛なことじやへほりの船宿合竹屋の人と呼子鳥

空ほの暗き

空ほのくらき東雲に合木の間がくれのほととぎす合びんのほつれをかき揚げて合櫛のしづくか合しづくがつゆか濡れて嬉しき合朝の雨

時雨

時雨降る合淺茅が原の夕暮にふたこゑ三聲鴈がねの合たより待身のうやつらや合戀のうきはしなかたえてやるせ合なみだやもつれ髪合ゆふに合いはれぬむねのうち合おもひやつたがよいわいな。

枯野

枯野ゆかしき隅田つつみ合心もさゆる夜半の月合田面にうつるひとかげにばつとたつては合アレかりがねの女夫づれ。

初秋

初秋や合名もふみ月の戀のなぞ合銀河祭のたわむれにサア合いつか女夫の約束はヨイヨイヨイヨイヨイヨイやサ。

わしが思ひ

わしが合思ひは三國一よ合富士のみやまの白雪合つもりやするともとけはせぬ合浮名たつかや立かや浮名合今は浮名の立のもうれしひとの心はあいゑん氣縁いつせつ體もやる氣になつたわいな。

春は賑ふ

春は賑ふ隅田の景色合うゑこむ松の色まして合梅の薫りのほんのりと合あだな合さくらに戀のふち合ながれながれし合水鳥も合いまはわたしも合女夫とづれ。

月夜からす

月夜からすに合ふと目をさまし逢ひたさじれつたさに合無理なこと言ふてわしや神いじりあひたい病がかんせふのせいか酒でしのがんせ合苦の合世界じや。

すがらしんになくではエエないかいな。

玉川

玉川の水に本調子さらせし雪の肌つもる口舌のそのうちにこけし島田のもつれ髪おもひださずにわすれづにまた來る春をまつぞへ。

捨小舟

戀の港の身は捨小舟寄邊もなみのうきふしにおしよ高島およびもないがせめて歌棄磯谷までところありそになく千鳥しほらしいではないかいな。

夕立

夕立や田を見めぐりの神ならばかさい太郎が洗ひ鯉ささがかうじて孤けんほんに全盛なことじやへほりの船宿竹屋の人と呼子鳥

空ほの暗き

空ほのくらし東雲に木の間がくれのほどとぎすびんのほつれをかき揚げて櫛のしづくかしづくがつか濡れて嬉しき朝の雨

時雨

時雨降る浅茅が原の夕暮にふたこ三聲鷹がねのたより待身のうやつらや戀のうきはしなかたえてやるせ合なみだやもつれ髪ゆふにいはれぬむねのうちおもひやつたがよいわいな。

枯野

枯野ゆかしき隅田つつみ心もさゆる夜半の月田面にうつるひとかげにばつとたつてはアレかりがねの女夫づれ。

初秋

初秋や名もふみ月の戀のなぞ銀河祭のたわむれにサアいつか女夫の約束はヨイヨイヨイヨイヨイヨイサ。

わしが思ひ

わしが思ひは三國一よ富士のみやまの白雪つもりやするともとけはせぬ浮名たつかや立かや浮名今は浮名の立のもうれしひとの心はあいるん氣縁いつせつ體もやる氣になつたわいな。

春は賑ふ

春は賑ふ隅田の景色うるこむ松の色まして梅の薫りのほんのりとあだなさくらに戀のふちながれながれし水鳥もいまはわたしも女夫とづれ。

月夜からす

月夜からすにふと目をさまし逢ひたさじれつたさに無理なこと言ふてわしや神いじりあひたい病がかんせふのせいか酒でしのがんせ苦の世界じや。

ほんに思へば

ほんに思へばきのふけふ月日の立のもうわの空人のそしりも世の義理もおもわぬ戀の三瀬川あわぬその日は氣にかかる逢へば口舌のたねなるにくらしいほごかわゆうてエエわしが心はなんじややら。

夜の雨

夜の雨もしや來るかとしたみざん紙でかへるのまじなひも虫が知らせて燈の丁字もとんだ今時分氣まぐれざんすエエ主のこゑ。

わしが國さ

わしが國さで見せたいものは昔しや谷風今伊達模やうゆかしなつかし宮城のしのぶうかれまみぞへ松島ほとりしよんがい

うつつ

うつつとと寝た頃たく柴の戸をたそと問へごもこたへもせずにもしやそれかとむなさわぎさつてもあらしかこがらしかぬしじやあらぬかゆめうつつエエにくらしい明の鐘。

新むら

紫のゆかりに似たるかき初にほのぼの告ぐる鶯の音にほだされくるん糸ア戀の上下の三筋だて花の寒さに春風をいとふて暮すじやいかないな。

海晏寺

海晏寺ままや立田の高雄でもおよびないぞへもみぢがり。

今宵の一期一景  
を贈る

すいた世を懸ゆへに ちほりくらすも ことろから 椿か香そへ  
る春風に二枚屏風を せし へだて おぼろ月夜のうすあかり せし  
のび せしのびて あひぼれの口舌の床のなみだあめ 池の蛙も夜も  
すがらしんになくではエエないかいな。

夜の雨

二上り  
夜の雨もしや来るかとたみざん 紙で かへるの まじなひも  
虫が知らせて燈の丁字もとんだ今時分 氣まぐれざんすエエ主のこ  
ゑ。

わしが國さ

二上り  
わしがサ國さで 見せたいものは昔しや谷風今伊達模やう ゆかし  
なつかし 宮城のしのぶ うかれ まみぞへ松島ほとりしよんがい

本調子  
うつくしと 寝た頃たく柴の戸を たそと問へごもこたへもせず  
にもしやそれかとむなさわざつてもあらしかこがらしか ぬしじ  
やあらぬかゆめうつつ エエにくらしい明の鐘。

新むら

本調子  
紫のゆかりに似たるかき初に ほのぼの告ぐる鶯の 音にほだされ  
くゑんの糸アア戀の上下の三筋だて花の寒さに春風を いとふて暮  
すじや ないかいな。

海晏寺

本調子  
アレ見やしやんせ海晏寺 ままや立田の高雄でも およびないぞへ  
もみちがり。

今印ハ一と調印一顆  
を贈る事

文云 師古

款云 芳雨心

竹口長つと

賣印人傳云

木村廿方雨陸前仙基人  
工書畫初子四條流後  
專法南宗用造冬回  
十三年畫山蓋作早所  
成家又巧刻印鈕



○和書館松雲堂より送利字  
校見字記一冊子と贈り  
来、廣瀬法意の日間瑣  
事中二卷十九天保十四年九月十日是  
利号校と訪名典籍を記すの記を  
披茅し、上海に書し、做宋活版に

附し中本也記多二十餘枚に滿り、同方を録す  
る長比洋からり、此書を校訂するに足る家老の尚  
書正義（足利各校本覆刻紙本舊版）の内  
二冊を貸付し、嘗て、書火の災は貸し給ふ二冊は  
先して家老に在り、書を多くし、此の小冊  
子も稿の既、上海に送らるるし、かゝる處を得  
りといふ、乃ち此の片々を一冊、余が珍本を撰  
性として出来ると思ふ、一言をききを得る也  
十月四日記

○昨日神内の山本書店に圖書を過り一珍書を得  
い得るなり  
十月四日記

一 説文解字篆韻譜

五卷合三冊

此書各冊の首部に明倫館印の印記  
ある外、安政七改の長方角の印を捺す  
尾張の古本の田花本と云ふこと知るべし  
表紙寛永式の流紙と云ふ古本揃と云  
し七行本と云ふ一行の篆字五字を配す  
元槩の面目躍如なり、惜むべし、首部  
の序を湖く外、二冊目首尾在り  
あり、三冊目又同じ、而して皆補字あり、  
の倫館印ハ補字紙に捺しあるを  
見んば、古本本々、早く後丁あ  
りしこと推すべし、いつれや同じ書を  
或る陳列公に元しことあり、元んこと元

の年輪ありしや、元々、慶長版子  
世者あり、多分北吉の西後刻なり、世家  
花に印書、富むと、最心元、数葉の印書  
ハ北、おこりし、珠とす、し（價、平、向）

○何者の珠味、何か書いて見よ、と思つておる  
折柄、石川欽一といふ人の北、頃者、ハ、細茶と、ハ、イ、  
といふ、ま、か、年、入、つ、た、か、り、評、後、寂、か、ら、後、人、の、見  
北、北、人、ハ、ハ、イ、ア、の、味、す、又、元、一、カ、一、七、ハ、イ、の、  
流、し、か、ま、く、者、か、れ、と、お、る、す、ん、と、お、る、と、新、子、真、ま  
ある、もの、と、新、と、珠、味、を、感、し、と、お、る、人、の、い、ふ、こ、と、も  
お、る、ま、も、物、味、し、と、ま、ら、さ、い、の、扱、ま、せ、こ、え、る、ま、ま、同  
感、の、ハ、紀、ら、て、る、と、得、ま、い、の、細、茶、を、お、も、上、か、ら、ハ、イ

つを、さ、す、ハ、自、然、の、味、も、あ、り、明、房、も、あ、る、ま、ま、  
質、量、的、珠、味、が、お、こ、る、物、ま、え、自、身、ハ、つ、ま、ま、ま、い  
ひ、ど、こ、の、能、の、や、し、ら、る、物、を、二、年、入、ん、と、云  
ふ、や、う、な、ま、ま、か、ら、う、ま、え、を、珠、を、ま、す、こ、と、も、あ、る、ま、ま、  
の、ま、ま、ま、ま、と、拉、し、珠、と、す、る、こ、と、ハ、勿、論、あ、る、名、工、の  
細、工、の、あ、る、と、ま、ま、製、法、を、一、巧、み、る、今、北、と、心、つ、た、ま、  
北、こ、か、其、の、材、料、が、上、等、な、と、ま、ま、ス、タ、イ、ル、が、よ、い  
と、か、ま、ま、く、使、用、さ、ん、と、ま、ま、協、の、と、あ、る、と、か、（た、ま、物、を  
ハ、ハ、）ボ、ール、と、ま、ま、と、の、軽、重、か、よ、く、平、衡、を、保、つ  
と、ま、ま、口、に、啣、へ、て、口、潤、み、か、よ、い、と、か、ま、ま、或、る、崇、拝、  
す、る、人、の、遺、る、か、よ、い、と、ま、ま、ま、ま、ハ、其、の、遺、る、か、よ、い、  
摸、し、た、の、か、よ、い、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
摸、し、た、の、か、よ、い、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

由とらうてくることいふまでもない。パイプで喫煙  
する人は、まんがシガーよりカシガレットより七優の  
としれが、そこをシガレットは泥棒やナラツと  
の喫料(こうし)してみる、何となく後つきのか  
る、ケナス換なる、その癖、ある回に於てハ  
上海社会のハイブを用ひる、高もあつた、  
を用ひると換作を受け、何と習得(じやく)といんが  
よ、も定まらぬ、唯ぬち名に備するの、人地が  
ある、ポーに烟草をつめる仕方、と、  
いる、あ、あのやり方がある、下にて殊に上にて  
殊容(じゆく)するがよいといふ、  
脚いしよいかといふ、人の業の匂合(きうが)つて、  
十二行

く、が、も、お、脚(けつ)入(い)る、後(ご)つきの、よ、い、そ、か、あ、ま、た、あ、  
る、外(がい)國(こく)心(こころ)を、用(もち)ふる、も、つ、あ、る、道(みち)々(々)や、ヤ、ニ、を、拂(はら)か  
ふ、し、と、ま、が、一(いち)式(しき)揃(そろ)つ、て、小(こ)々(々)ニ、ツ、ギ、ル、や、貴(き)金(かね)の、属(ぞく)  
び、セ、ツ、道(みち)々(々)の、如(ごと)く、出(い)来(き)て、あ、る、も、の、か、あ、る、を、先(ま)を、時  
計(けい)の、鎖(さ)り、な、ブ、ラ、下(くだ)け、を、一(いち)種(しゆ)の、飾(かざ)り、と、す、る、こ、の、あ、る  
が、通(と)人(にん)の、ま、ん、を、卑(ひ)し、あ、や、ハ、リ、灰(はい)の、手(て)の、采(さい)こ  
受け、を、舞(ま)ね、たい、ヤ、ニ、カ、リ、ワ、ン、シ、ン、ユ、リ、を、い、ぬ、の  
七(しち)取(と)り、度(ど)い、とい、ふ、お、る、海(うみ)泡(うた)の、意(い)味(あじ)ひ、あ、る、メ、ー  
ヤ、シ、ヤ、ウ、カ、イ、心(こころ)に、パ、イ、プ、は、如(ごと)く、白(しろ)紙(かみ)の、こ、と、を、白(しろ)  
く、ま、ん、の、道(みち)々(々)や、ニ、カ、に、じ、ち、を、茶(ちや)福(ふく)も、あ、る、こ、の  
の、ま、あ、る、か、し、その、元(もと)板(いた)に、注(つ)ぎ、を、要(よ)する、指(さし)紋(い)  
が、印(いん)する、その、如(ごと)く、キ、ツ、物(もの)と、ら、う、る、こ、の、こ、の、地(ち)の、ハ

イフを用ゐるもののキワトの手紙をはらふとまゝに  
おろ。えんを切るをも度しつゝ細くをゆへ、後に細くを  
ひ出るとすいれ、マイレデー、ニコチンの内にある匂い  
ある。

... The old paper put aside, I turned to a  
merchman, which had been presents  
to me years before, with the caution  
that I must not make it unless  
I wore lead glasses.  
日ちむせおのあふはらんににガレットのおこじと  
キワトの皮が人前をさ輝らす下着を拭くことか一時  
は身に行りんにあらむあるよりのパイフを不持してある

といふ、此の社名の渡りしはあふ、えんをたえは金機  
を携すぬ、赤いんを踏ひつゝと拾ふ婦をよ  
あることとて重なる、一年二年用ひて鉄にが  
あることかあらむも棄てらるるかある、パイフの  
ふいのをさするもの、英王の首飾ひあると著者いふ  
あてあるか、其の産せしもの、<sup>老</sup>漁のものが興味  
此の道の耽溺者といへつゝ無上の愉快であるとい  
ふいたもあるべきである、アムジエリヤを産する新  
世界のパイフ、カラバツシとかいふもの、こんとパイフの  
軟く曲つておろ、一寸奇つたものだが、こんとガラスの型  
を製するの、いせい間、精めをほつたといふ、コン  
サとの、あふの、人の、さばるゝといふ、あふ、まゝ、



リンストン大尉の日記を二巻の習を著きつける。北大寺  
の米田獨志の紀念を著し英武を捕獲した大  
砲がナツソオ、ホーシの重心中の芝生に振付つて  
みる。その生が赤葉のくまると、打掃くをパイ  
プの喫煙切しをみる。此の大砲を元摺りして別  
れの歌を高唱し、そして終るを其のパイプを砲  
身に射撃きつけること。のかわ習得をうらむる。  
来んジニアアスよ来ん、而して油の  
パイプを充つ  
油の甘方多を極めを香煙を上げよ。  
いざ往來を極めを吸らん、別れの煙  
香煙を

よきなきことぞ去りし日の為に  
よんを石川飲一が北大寺出身者であるので目録を  
のぼる  
十月、若の記

○朝鮮の敵の大流石に龍山織る。同を彼もあや、  
没する様子があつた。彼等は皆身を消るをたぬ家  
を全部を喪失した。その等の報先の向とたのぬき  
に願話がある。こんな心得おくへき事である。  
六室の経験をも浸みさる。結ぶる。天日に曝す  
可らも、一冊く重なる。陰乾し。こぼか。はきの時  
分、表紙をブツはらう。を製する。八樂に  
候  
書架書棚を著物又ハ物名を元湯し。はき



と云ふ元あるとある骨董部類は二  
百以上中残るをみるに多し  
であるが、可とうものもある、こ  
れは三交塔の  
為めといふものも或る核を  
ある印の類は全部出さず  
ある、十月  
吾徳

○大阪市西成区玉出町本定男といふ未だ  
人から竹田の書し丸山陽物因對の圖と山陽愛  
玩の文房茶器を展覧の圖二幅を言ふ  
寄せる、此の對座の圖は隨筆山陽に收め  
かつたものもある、文房陳列の圖はこれと  
うらむものがあるが、對座の圖と併せて是れ  
拙著

に收めたいと思ふ、而もる感に、對座の圖は酒  
室の圖かと思つたが、さういふと、烟壺を中  
に對座の圖は、山陽の背後に山窓がある、竹田の  
のし口向きに欄、松の盆栽が一鉢置いてあり、楹  
に、山窓が見えてある、此の山の流石におも  
うらむ、山陽の古像に似てある、さういふ  
者もある、大雅の圖は、比するに豊類に肥  
へて見ると、文房陳列の圖は、机案の上  
に筆研茶器を  
置か、右側に高卓かあり、香爐かあり、左  
側に火爐がある、あ、これ、新茶を煎茶器か陳列  
してある、皆山陽愛玩の類である、こ  
れ、さういふ、對座の圖は、竹田の題詞がある

殿南塔尖紫翠亭間練光一帶鴨河漢吾  
今来北窓三日、寫取十年夢裡山  
癸未榴月寫於賴氏寓居东山

田舎口

此の點の極の左端に條を以てある、又序の列の  
後條と點の極の左端上部の飯白に横を以てあると  
左の如し

北卷為亡友秋山陽如西草を因余心之後  
棄置不復記懐頃在田仲見出示索題乃言  
二十八字曰曾守初園已成春蕭條門徑舊  
松筠夕陽蒼老前川暝不見回呼家鴨人  
題畢不覺愴然淚下

十二行

休田生再題

此の二幅のま余に親後感慕を古七と稱い來り、則ち  
長簡を以て之を謝す、此の以て枝郵 十月五日記  
○拙著隨筆、縁と有り冬予は山陽墨蹟の鑑定  
と書名の事あり、余程せり多く、此を定めて  
可名真蹟を言ふ、如斯くして従々材料、此を  
るべき目遣墨を居る、之を見ることが故耳  
昨日七山陽跡史、厚紙と古巻の字を以て持ち  
來り、その事あり、厚紙の如く、厚紙の如く、頭  
の逆節也、余巻の字を以て有り、受けける、大眼を  
押し、此巻の由来、就てハ卷首に頼海の識、行  
き、左の如し

山陽為其言其文及并散人所謂莫逆友也  
文以乙酉之四月誘此二友拉曼才拓植君續  
南遊阻雨宿於南岸松軒之主岸氏名恭  
字子敬雅琴乃為其舊門生也此橫披則  
淹留中所作各家詩句極精錄其毫無不指  
叙其實情殊到第感墨絕如動人蓋字  
眼前景象致者萬成全則山脈行餘亦低  
起伏遠近濃淡變化無窮不可端倪之為  
偉觀也所就友曰松留其文況于翰墨也吟  
咏文苑快事也雖寸楮零蠅後人展視亦足  
以追慕其凡流文采况於完璧此橫披字  
洵為天地間之寶也

甲子臘尾賴遊軒後

此長岸琴乃為一淹留也 山陽會其山休心不  
の神畫を集めて一巻とす なるものる巻首に非  
の題字あり 回南息翼」と横にす 山陽の長岸  
と山ありと収む皆此の旅次と関するものなり 山陽  
の詩画に特に家悦に復たありしめを家悦に花を  
能く故に愛に有解するもの 長岸の詩の居に左  
の横にすを抄す云々

乙酉五月南遊後承 一前一即終  
句而後承 弼狀態多可嘆者 我化  
此記之 碎畫口口

長岸の一斑之に依るを家悦とす

山陽の詩を好むもの甚や二三紙あり其相抄  
左の如し

鞋鞞無如凡雨夜驛亭枉路故人園  
燂湯洗脚呼温酒茗拊檮禽未飲  
此

向麦将秋雨意闲墨江南云歌亦環  
刻心天氣陰時際高體人衣單袷  
潤縑素推來相設矣河多閑思  
未看山批把蛤蚧多鮮脆時釋  
腰瓢對解顏 山陽外史

○正平十九年保浦の道祐居士が鑿梓して論語集解と就て所謂道祐の何人であるか今も知らぬやいかその複製の内古神徳の楷法を尋ねてあるとある古神徳とい何かあるかと今も不明な所があることにか、とんちやツト大正朝代之首尾は生かあることか知らぬに係し目下通人といふ輩あることか今も不明である。

○支那の唐代：版本の有無に議論と云うて了るか追々唐代に版本が徳無であるといふ事があるが分つて来れば近年西本乾孝の佛光大蔵図考校長亮氏祜祥といふ人が一事の實を見るに及んば唐末懿宗の咸通六年（西曆八六五）に在唐して延曆寺の書

佛田載（最澄の弟子）が長安の西門寺といふ寺に咸通六年六月から十月まで留錫して種々の典籍を考へたり或は梵文集して其中に印本の唐翻五卷五冊三十巻があることが、新書宮法集法門寺目録に見えておるといふから、唐代に版本の如何であったか相違する、また今も欠けたものを一に日本におく未だんとて、その西の如何ある、此の咸通六年といふ三年の後の四月十五日に王依といふ者が印行した金剛般若經一巻が是年（一九〇八年）英國のスタンガ敦煌から發掘し持帰（り）今 British Museum の King's College の蔵にある、その出版は日本文学雑誌の院

羅尼より万年七あるか、此種は後者あり、版七極  
の二見、このことあり、其の字を改め、版七あり、  
新村、親しく此種を兄と来比の七ありから、展代  
の版七といふ最早、さか難く、うて来比、ありし  
吾、改め、版七といふ早く、出比、版本を、さか、兄、南、さか、い  
○、此、改、寛二といふ、農、さ、智、の、士、ら、日、本、者、居  
業、の、特、名、も、日、に、就、て、の、海、渡、も、つ、ま、さ、い、ん、と、脱、ろ  
け、の、考、へ、お、比、こ、と、が、ハ、ウ、キ、リ、を、う、ろ、う、と、西、洋、式、の  
耕、心、法、か、何、か、行、ん、難、い、こ、と、い、ふ、物、案、が、解  
け、り、し、る、や、か、う、さ、う、其、味、を、感、じ、た、日、本、の、農、業  
の、大、特、徴、も、さ、あ、へ、き、ん、家、庭、的、農、業、と、い、ふ、あ、ま  
る、中、一、親、摸、が、五、し、ち、い、さい、多、く、の、人、備、の、大

親摸、こ、や、こ、と、い、ふ、性、後、の、さ、ま、い、備、人、を、總、稱、こ、仕  
ハ、ぬ、と、い、ふ、さ、ま、い、の、一、村、に、割、り、さ、く、兄、と、平均、三  
十、人、こ、さ、ま、い、と、い、ふ、か、う、多、く、を、無、い、と、も、い、ひ  
得、る、家、庭、農、業、ハ、才、一、田、植、と、い、ふ、こ、と、を  
さ、の、幅、が、限、ら、ぬ、田、植、と、い、ふ、氣、即、ち、あ、る  
一、本、し、て、さ、の、僅、さ、な、日、子、を、や、つ、て、の、け、め、ら、る、ぬ  
さ、ん、う、い、え、ん、全、家、奉、け、て、努、力、を、な、す、ら、ぬ、其  
の、北、しい、こ、と、ハ、外、常、と、あ、る、田、植、は、は、ら、う、は、機  
械、と、呼、ぶ、と、無、い、い、くら、西、洋、に、も、あ、る、田、の、田、植  
に、便、利、な、機、械、を、工、具、と、す、こ、と、ハ、生、来、ら、ぬ、の  
直、き、時、と、い、ふ、法、を、簡、便、と、す、ら、ぬ、が、雨、や、雪、  
を、始、の、妨、害、の、以、免、に、結、果、ハ、あ、る、こ、と、を、い、ふ、か、ら、こ



九の農家のいふに、何んとしてか、日本の耕地は、耕心法に  
 専ら特徴を生ずる、日本のことき、雨の多い、夏に  
 熱い、水田が多かる、と得ぬ、世界中に日本を  
 田畑に多くの肥料と多かる所、何故か、  
 といふ、雨の土質、今に云ふ、自然の肥料分、と  
 流すか故、日本の土地を、雨に流す、肥料  
 を施すこと、が世界に、一であるが、冬は、又雨に流さ  
 せ、は、唯、水田が、地を、流す、肥料、と  
 こん、受け、か、強、無、駄、なる、人の、比、この、為  
 め、も、水田が、必要、である、世界の、多くの、地、雨、か、あ  
 る、為、り、天、地、に、倚、り、地、中の、肥料、は、流、さ、せ、ら  
 る、か、る、為、り、日本、のこと、多く、肥料、を、要、せ、ぬ

地中の肥料を施さぬ、又

日本、米、土、のある、方面、の、如、き、夏、雨、か、降、り、ぬ、り  
 る、水、を、灌、水、の、設備、を、要、せ、ない、大、規模  
 の、農、具、ハ、三、十、頭、の、馬、を、用、ひ、る、こ、と  
 か、で、る、エ、ム、バ、ハ、一、ウ、エ、ス、タ、ー、を、用、ひ、る、こ、と  
 の、出、来、る、も、稲、か、乾、燥、し、て、あ、る、か、雨、か、降、り、  
 稲、か、シ、ナ、タ、レ、テ、は、此、等、耕、作、に、用、ひ、難、い、とい、ふ、か、ら  
 氣候、の、測、定、も、見、て、日本、も、大、農、大、耕、心、法  
 に、行、い、難、い、譯、である、日本、は、どう、も、エ、ク、シ、メ、ル  
 運、命、である、冬、は、  
 冬、の、氷、雪、も、年、か、か、り、雪、ハ、実、に、少、く、な、る、こ、と、  
 其、の、丹、精、の、結果、も、一、朝、暴、風、の、ため、に、全、國、に、雪、が  
 下、り、る、事、か、ある、折、角、取、り、上、げ、に、収、獲、を、雨、害、に

せらして腐敗せしめることもある。日本を雨の多い国  
と見るのが目的と又それを西風の如きと絶く別する不  
七五の、吾家の苦心は随つて世界の他のよが悲慘の  
及ぬぬのよかある。外人の重なる小麦を公料とし  
てあるが、いんち切つんのあることを、小麦は雨の多い国  
とて産せしむるのよかある。日本は氣候の關係から  
小麦は到底うまき育ぬ。温氣か言をすむる  
りか夏の暑きなるさき收穫のよか梅雨かある  
よや夏の敵である。小麦が白人の公料とすうてお  
るのも必竟、川土か小麦の生産に不適するからである。  
日本人か米をすむるの習性も勿論米産地であるか  
らであるが、小麦の産し得るのうらむかある。又

日本より家畜高貴は其に振いさるゝを農家の  
之んニカをけく、地を耕しきるを耕作とたのしい者  
めと一ツの家畜を養ふ若か氣候候と合はず、硬く  
るることか困るのと、梅雨のよか乾燥か出来ず  
て儲蓄に不便利であるからである。此れ日本に  
牧畜に、**馬**もすむるが、**牛**もすむる。このよか梅  
雨か多い、大陸と同一氣候候である。牧畜かよ  
出来る。牧畜は一向に盛ん。与のよか世界は優越し  
てあるのを羨望せむである。えんを氣候かよか  
あしとみるといふよりも家庭の業とあしとみる  
から、日本の農家か細心の努力を辞さざるか、  
成印するのよかあるが、世界のよか、四十七美の

終戦事業の進捗減退してあるに終三ハ日本と支那の  
 有るときは傾きもあるが、志し決して割り切りのよ  
 仕事にいらる、唯此環境の二層家から格し  
 るいからやつといけこのひある、日本の農業の大勢は  
 唯此層家庭的である、家庭的のよと混り成りとし  
 である、抱つて其の規模は甚だ少日とくあるが、少日  
 さい丈とくは届いてある、機械を用ゐるの、人手  
 が多くかゝる、機械料は世界中尤も多し、らるゝ  
 が、雨の為の肥料費が世界より尤も多し、青く  
 である、何れも力の混り田地、注めんとあるから、世  
 中日中の如く耕地の傾の高の、高し、ハ心地之の  
 関係問題ハ多と略するが、家庭農業規模のハ

耕地は充分の地があるからハ争議を惹き起す  
 七自らの地がある、併し日本も耕地のひらけ  
 である、亦進んびる所、凡そ世界の農心  
 四階級ある、才一粗耕、二と耕心法ハ原始的  
 である、才二圃耕、三と家畜日の力をサ耕りし  
 耕心するの、才三殖耕、四と殖民地を  
 む大なる力を家畜する、才四は園耕、五と  
 大規模に栽培するもの、才四は園耕、こ  
 れハ人手をとり細心と園藝的の耕心する  
 一者、才一の専攻ハ園耕ハ日本ハ才二  
 才三に居る、才四ハ

日本農業の特色ハ園民のおぼやもよるのハ

が氣候風土から起る事か其の王國にあり、西洋の商便の農具があるからといふ事も、多く用ひかゝる、大農法が利がある事も、多きを以て移用する事と、難の農民に勤勉の習慣があるから耕地が廣く、雑草もさして来りぬ、か、農民の氣風が變り、勤勉の習慣が、九折する事と、農園の荒れも、亡びゆくハ火を踏む事も、外の法を移して治農が出来た事、ハ、多の特徴から、其のめがけがある、風習の變化ハ一概に氣に、中々及ばざる、農家の氣風の變化ハ法と経る事と見ることが、此の海濱

を聴き看切に感し

十月七日記

（寄附）

○植烟心ちり、一箇を定る事、此人未だ而る事、ことよりけん、郵便印紙の蒐集と其の研究、新て其界を拓きて、郵樂といふ雑誌に執筆してゐることハ、己ころと、此人より寄せられたる、大言と、郵政の之祖、前嶋勇吉の事、成田頼則といふ人が、寄と、脚邊権正といふ事、郵政の之祖といふ事を、前嶋が、其の切を奪つたと、北園といふ事、其を採駁して、一文の郵樂に載せられた事、兄と、其の雑誌を、寄と、来と、且つと、其の、文の協会の、出版文化、及、祥合の、陳列、前嶋の、從



驛遞權正成田賴則氏の功勞に就て

樋 畑 雪 湖

本年三月八日發兌の北國新聞に鶴見欣次郎と言ふ人の調査に係る元驛遞權正成田賴則氏が郵便創業に貢獻した事蹟があると稱し六年の努力が前島密氏に功を奪はれたとさへ大袈裟に書てあつた、或る會員の内から質問があつたから調べて見て呉れまいかとの依頼を木村郵樂會長から受けた、余も一寸驚いた其の歴代の驛遞官の内に名を列してゐた事は記憶してゐるが氏の驛遞權正になる前に驛遞司知事をもした事があるがそれは前島氏より數代も前の事で郵便の郵の字も當路者の頭の中には芽の出てゐない頃であると思ふたけれど其

の時に余は朝鮮から九州駿遠三から山城大和の方を經廻つて信濃に三ヶ月餘も滞在した頃であつたから手元に何等の参考書もない、であるから其儘になつてゐたが此程後半歳ぶりで蝸盧に歸つたので前の約束を果すべく少しく調べて見た處によると明治元年二月三職八局を置き内國事務局中に諸國水陸運輸驛遞の事を督する役所が出来て權判事中山猷をして其の事にあたらしめたのである(猷は本願寺に仕へて帶刀と稱す後石巻縣知事をした人だが其の長所は漢詩人であつて此の方では有名な信天翁其人である)此時の驛遞事務は各藩縣の驛遞掛の總元締で船問屋や飛脚問屋に對する支配頭であつて要するに徳川幕府の道中奉行の事務を繼續して東京と京都との公用馬繼

定を世話する役目に過ぎぬ故に其仕事はだれにでも出来るものであつた只茲に驛遞官吏の心を勞したのは御東幸に屬する人馬繼立の任務であつて汽車もなければ自働車もないから御道中鳳輦の昇人供奉人の宿舎割これが却々困難であつたが其の外には腦を煩す様な事はなかつたのである從て驛遞司の知事や正や頭やは敏腕を要すべき所ではなかつたのである 同年四月權判事中山猷を驛遞司知事に任じ山本藤十郎を驛遞司知事補に松井清蔭を同判事に任ぜられたが同年七月山中猷が知事を辭するに及び同十一月松井清蔭が其の後を襲ひ同二年二月商法司知事安藤就高も亦驛遞司知事を兼ねる事となつて驛遞司には知事が兩人出來た、憶ふに其の當時は東、西京に各驛遞司を置

横朱を加ふに郵便條例の稿を出し比のを見てある程よく前島の創案であることとを主眼とする材料であるが、其場に来親し比が克今見ることか出来さう比から、閲覧の便利を思つてゐるものか自身比の文字大意である、自今と之定、成頼則が驛遞權正であつたことを知る女位である、多分が郵便の元祖であるといふものも、抱畑の断案：同意せざるを得ないものもある、前島の潔癖の檢査にスリッパをあつた比をいふ人の功を奪つたかも知れない、自傳を七自家の功を街うといふ家の制り、鴻爪痕を編纂

れたから兩所に長官が必要であつたのであらう同年五月民部省に驛遞司の移管された時松井安藤兩氏の知事を免じ同省出仕であつた成田頼則を撰んで同知事に任じ同年七月驛遞權正となつたのであつたが其の年の十一月平岡照一も亦驛遞權正となつて二人の次長があつたが翌三年二月成田の本官を免じて平岡のみとなり同四月には平岡は監督正となつた、此の成田の免官は表面依願ではあるが何事か其間に事情があつたか否は不明である、而して其の翌五月には租稅權正前島密が新式郵便の條件を提げて驛遞權正を兼任する事となつたのである、此の提案の新式郵便法の計畫は前島一己の努力であつた事は其の當時の文書は一切氏自ら起稿してゐるのを見ても首肯される、曾て

驛遞司にある筈の此の一件は其の所轄本廳であつた大藏省に存在してゐるに相違ない、然るに震災に於て是等書類は烏有に歸してはゐるが其當時の回議書の二部謄本は幸にも逓信博物館に存在し又其の建築の稟申等は内閣の記録局にもある筈で成田氏の何等關係した筈はない事は是等の文書によるも明であつて従つて鴻爪痕の記事も太陽記者の聞書ではあるが或る程度まで之を信じ得ると同時に授爵を奏請した時の逓信大臣芳川顯正伯は前島男と共に要路、就中通信に聯絡のある電信業務に關係し或は内務省にあつて男と施政を談論した仲間であるから其間の消息は極めて精細知悉してゐる筈である、而して新式郵便計畫央で前島の英國行となり杉浦讓濱口成則が尋で逓信權正

となり濱口は後驛遞頭に任ぜられたのであるが前島の計畫を助けて郵便創業を爲し上げたのは實に杉浦權正と寮屬眞中忠直等の効績に俟たねばならぬのである。

以上の事實であるから成田頼則の驛遞權正時代に郵便の議が廟堂に起つてゐないと云ふ事は文獻に徴して明瞭であつたとしたなれば單に徳川時代の道中奉行の職務に過ぎぬと言ふ事が出来る、そして余のせまき研究によれば歴代の驛遞司知事者は正權正中前島の外に信天翁と平岡照一に指を屈する外は平凡なる人物のみであつたと信するのである妄評多罪。

お待兼の十三錢切手は漸く此の十五日から賣出しました。

の時困つた位のことである、此の如く、追々時代を往くにつれて、  
のこともさへ出する、ぬる家り出るの世の昔は、こんな  
とも其一例である、自らが他知と更々これ手紙の概要  
ハル斯ひき、此の兼駁と前島の功績を裏書きする  
一の資料であるから、特に更に復に収めることあり、  
(十月八日記)

〇、行楽といふ能依が美の園と解題し、余は故味  
の後流と望みながら、出籍目、紙のことを修り出  
したが、即ち左に収める所のよひである、(十月八日記)

児玉天雨の遺印

十月九日の購入

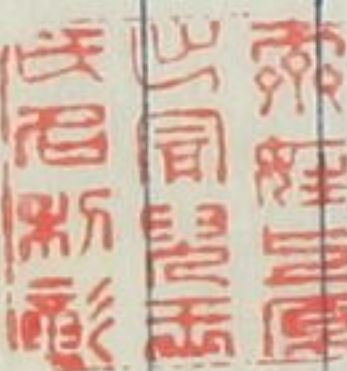
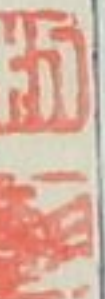


近世名家

新印の

架中

加ふべし



○十月九日の午後雨天より多量の雪を伴ひて外出し本日の  
下谷の雪解と訪ふを若干の園書と獲る

一 變物集

三冊

匿名者佛土より刊年不明の古書度法  
字本より巻尾寛永十二年持主の墨を  
ある雲母文板の表紙つけあるを以て通例  
此紙本といふ、價四十圓也

一 江戸大徳園

一折

延寶五年 林氏去永刊家持江  
戸の法圓あるも延寶の園也

綱く、延寶、寛文の次天和の前の年  
編り、延寶、寛文の三版ありと云く  
共一也 價四十四



一 詞林三刻

一冊

古鈔本題云三卷又深三初秋  
中旬とあり、開巻と古香挿あり  
寛永頃と此書の版本あり、人  
多々似たり、元八末に版刻あり

時の鈔本云々

一 佛座臨帖

一冊

藻衡家古今六集帖五中村佛  
毫の跡も法内の一冊とす。卷首  
「蘇東坡の余副般若波羅密經  
を臨す。唐貞士二月十一日跡とあり、  
元原本文部才十八卷也、其次蘭  
亭洗帖を臨す、元文部才十九卷  
の二文政唐寅十一月十四日跡とあり、  
北原者の余日未に見す此の帖も北  
原の和文の序ありその序も臨す

十二行

しあり、佛座の臨帖をつとめたりし  
此の鈔の冊子極めり多し、家元  
一二あり、まんと併せ置るべし

種豆拙考 醫元冲 漢識

植字を以て閩秀の刺繡、如と謂ふべし  
○あは人の録に吉本の内、安持持方の記が  
靴のあは、多しのあは蓬原をよ人の記しに  
此人の北村を支配し人であること、文中に記し  
であるが、北人のあは、代有るのけんとも未  
れ、日可をも神へ、降らるの、隨る此の安持  
持方と云ふ地の高倉村地内と云ふ、ハ黄の、もも  
ある地である、と記し、あはを、常陸目であること  
とがハツキリ、武武伎柳原とも云ふべき、あは地  
である、あは、ここ、全全文を抄しておく、十月の記

安寺持方の記

小笠の流石も、西へあるは十三三三の路行て高合村  
と云所あり、其付邑ニ夫より六七里故七山深く  
隔て安寺持方といふ所あり、余郡下の邑夏  
癸亥の夏此村の次手へ行けるに其道崎  
こして輿馬も道外わしのうち高合村にきりてお  
行しけるに峡をよる谷をこゆると出沒する  
るく四方皆竹盤とて古木森々終り日の支  
りともす、河原の音松萩に入て冷寒肌をさし  
寂寥いふ計なりや、行て生一系の樹を  
見ると是をあるの居て、河原の石溜持方と  
いふ、去らばいそかんを、行るとの漸其地

ありと見せ、四方高合とて中々同さる所は家  
僅り九軒あり、九軒の男四凡四九人ありし  
女八、濃朴とて言修又々々、恰も上右の人の也  
若本を備へて衣と野着をとりて念を、又  
字も古きなり、故に古より目くら帳といふを、  
年貢の收納をさする、豊後カ滞り、  
常七期を以て、  
公聴を、朴直の風俗を賞し、  
一初五俵

持方村の地

元衛り

衣(る) 州(る) 衣(る) 農業(大) 切(り) 儀(り) 年(年)  
貢(儀) 徒(無) 之(内) 上(納) 化(寺) 儀(儀) 里(儀) 三(年) 左(右)  
下(下) 神(儀) 美(美) 袴(袴) 下(下)

但村坪一同三ヶ年作取ハ並ク之通

持方村  
相方姓代

本一坪方姓共別て凡儀定定其ニ付在坪方  
姓十二人持方今年が三ヶ年無年貢作  
リ元コト 柳付コト

女浪朴也也寶曆の頃迄ハ女浪居居る事と  
志しを奉行あることと知事とつくり女か何の事  
より来りし何の年と誰といふもの事考ふべきや  
らん因り又宝留控といふもの事考ふべきや  
う事といふ只為在る事考え親事と云傳ふ  
るより高倉村舊記ハあるといふいつの比も

山形村の者ハ生瀬村へ来り居る村方と云き  
といふもいへりぬを越え居る村方ハ今ハ其  
同姓を元女といふ者其内の長る姓を持方  
寺ある所の支配あり其家の内ハ家ハ皆神  
氏より獨居十といふ者須賀川氏ことと云  
又持方より三里程東にありてある寺といふ地  
是れ同く浪朴といふ又宝の通田より故三ヶ年  
曆より可なり家ハ軒廿四の凡三十九人あり  
増ふ氏よりといふ先聖王村重國お七へ  
深山出見の中といひ居る事かゝる文化三ヶ年  
御代ハ生居る事考ふもの事考へるハ御代  
へきことと云ふ所の者代四人を高倉村考



享和三年癸亥夏十月  
蓬原主人 日記

隨筆賴山陽に就て(四)

後藤 肅 堂

十六 山陽先生自叙傳

前回は詩で終つて居る。若し著者が山陽の此の詩を知つて居つたら、あんな輕卒な判断は仕なんだろうと思ふに就け、今度は少し詩の方へ鋒を向けて見やう。  
著者自ら「詩には全く門外漢である」と云はれた(一八八頁三行)それを謙辭でない眞實な告白として肯定す。

(一六) 山陽と袁隨園項中「武元登々庵が手に入れた古詩韻範」云々と、日本詩學史中最大なる産物の一(或はむしろ唯一)なる登々庵自著の此書を、支那人著述の舶來品と見立てた所などより觀れば、著者の前言(詩には全く門外漢)を謙辭でない肯定せざるを得ない。詩は山陽の自叙傳である。詩を除外しては山陽は出て來ない。一體日本人の漢詩ほど愚なものはない、たゞ支那の口まねする以外何の能もなく、巧拙優劣は一に其口眞似の上手下手に在る。曾て日本を知らない、日本人を歌はない漢詩の、日本化國民化を試みたのが山陽である。たゞ試みたと云ふ、成功如何は別問題である。他の

隨筆賴山陽に就て

邦人の詩は皆「嘘」で丸めて居る。山陽のは「眞實」で堅めて在る。上手下手は措いて眞實で堅めて在る。此點に於て彼の詩は彼れ自身の一部自叙傳である。詩を知らなければ山陽は出て來ん。著者はそれに就て「山陽の傳や逸事を録した書は明治の後も多く出て居るが、山陽の詩を評したものは一つもない（一八八）と云はれて居るが、自分の前（一番最初）云つた如く、山陽は一つの傳記をも持て居らぬ。木崎君の三好著は純粹の資料である、山陽大觀はデパートメントストアである。若し評もしくは傳らしきものありとすれば、それは只故思軒氏の「頼山陽及其時代」であらねばならぬ。思軒氏の起筆は彼の詩に始つて居る、そして縦横無盡に徹底したる觀察を發揮されて居る、山陽を論ずるには詩を除外してはならぬ。山陽論者として彼の詩を論じたものがないとは云へぬ。思軒氏の徹底したる新しい見方から云つても、山陽詩乃ち山陽自叙傳である。

本書山陽酒曆中、酒の手紙の一項。三枝光太郎氏所藏。劍菱主人へ宛てた山陽の手紙三十幾通は、特に吾人をして羨殺に堪へざらしむ。抜書のみ略式で要領を得んが、著者一たび山陽詩集を繙かば、此にも面白い對照を觀たであらうに、惜い哉。たとへば其初に「此坂上と云ふ人は酒を醸造はするが自身は酒をすかぬ人と見へて煎茶の趣味を持て居た」とあるのは、丁亥集に、題「劍菱主人茶盞。主人不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>飲（詩略）」とある。今さら「見へて」所ではない。中頃に「佛にはヤハリ黄金を供養すべし、旅中故也。頼には劍を食はすべし穴賢。」とあるを解して「佛

あるは何れ何處かの僧の事らし」と月井みの講釋をして居るのも、詩を知らぬ悲しさからである。矢張り丁亥集に、「劍菱主人來<sub>レ</sub>京」と「詩佛來訪」との二つが載つて居る。宛も同時に來京したので、所謂草鞋錢拵へのため詩佛を劍菱主人に紹介し何か書かせたのである。「佛には」、「詩佛」これほど分り易い話はない。これには山陽から劍菱主人へやつた手紙が山陽手束帖の二に出て居る「詩佛如何、さぞ飲なれ候事と存候よろしく御傳へ可被下候。酒の世界へ影向佛を此方より濟度候事と被存候」云々（大文字の夜）これで一切が御分けになつたでしょう。

一部詩集を見る事に依りて、これだけの御利役がある。詩を見ないからして來る悲哀は（一一）山陽と宮原節庵項中（四一四頁以下）に尤も適例を見る。最初に節庵の、先生醉後歸何晚。也把<sub>三</sub>薔薇<sub>一</sub>插<sub>二</sub>竹籬<sub>一</sub>。とあるのを見て、「山陽が此花を賞した事が思はるゝ」とひとくく感心して居らるゝが、一體此詩は山陽が木屋町移居の時「更慮南籬春寂寞。又乘<sub>三</sub>疎雨<sub>一</sub>插<sub>二</sub>薔薇<sub>一</sub>。」とあるのを、鸚鵡返しに三本樹相地の所へ使つたので、此時健藏君（節庵）瓢箪をかつがせられて三本樹邸の荒地起し（移住前）のお伴を命せられた。先生はチビリノノやりながらだからよいが、自分は飲まず喰はず働く。腹がへつてたまらん、早く歸つて飯に有りつきたいと考へて居ると、先生又チビリと一口やつて何かしはじめ、これではとても助からんと云ふ必死の場合の即吟である。

薔薇は此時分京都の流行であつた。所謂長春の木薔薇ではなくて、庚申薔薇乃ち蔓薔薇である。戊



子夏秋之交咏園中草木の第三首に「月季毎月開。籬落莫風露。」とある。月季乃ち庚申薔薇である。

### 十七 間借から借家へ

モ一つ「山陽先生宅賞木屋。」の詩の所へ、「此の詩に依れば山陽の庭園は薔薇の外に木屋もあつた事がわかる。」(四一九)と云ふに到りては、何等の迂疎ぞ。これ全く詩を知らざるより生ずる弊である。

水西莊の木屋は有名なものであつた。花の盛時は其香三町四方にも達すると云ふ山陽先生御自慢のものである。そして其歴史も神代卷は分らんが、人皇以來はほゞ分つて居る。

木屋町へ家を持た時或る人から贈られたのだ。同所移居の詩に「怪吾園桂著花遲。」とあるのがそれである。それを三本本定居の時ゑつちやらはつちやら持つて行つた。謙藏君(節庵)その時も植木屋の手傳ひをさせられて大に憤慨したものだ。と云ふと、モ一つ市區改正からしてかゝらんと、此木屋一本の引越しが六つかしい。

本書本文に木屋町引越しは出て居ないが、年表には文政四年春とある、大變な間違ひで。本當は文政二年春である。此木屋町卜居は山陽傳に取り、或は三本木定居より山陽自身には重ひ意味のものであるとも云ひ得らるゝが、今日まで誰もそれを注意して居らん。注意して居らん結果が、此年表に三年も違つたものとして出て來ることとなる。何故重いかと云ふに、水西莊定居は羽翼既に成つた山陽として、それほど苦痛もなかつたが、此木屋町の方は、四十歳にして始めて人間らしい家を得(借屋ながら)山陽先生間借生活からやうく一本立ちになり得た分水嶺であるからである。

此木屋町定居は本書年表のみではなく、他にも往々間違ひがあるから、こゝでちよと中坐してそれを一度辯すると、山陽の九州遊は從來世間で失敗に數へて居るが、それは學者として堂々の陣が張れなかつた方から云へば、無論失敗だが、此時彼の地位はそれを苦にするほど高きはなかつたので、其方御本人存外平氣なもの。反つて賣書行脚としての書家かせぎは内々大成功し、懷中ズッシリして來た。そこで母を伴れて上京する。一旦母を大坂へ置いて單身上京し(母は大坂生れたから親類も多く反つて其方が母にも望みだつた)間借生活から妻君を引つ張り出し、小さいながら漸く一本立ちの人間となつた。小さいと云つてもそんなに耻かしい程ではなく、太田錦城を迎へ、天下の英雄君と僕と氣焔を吐き合つたのはこゝである。

證據……ですか、ナニ證據がないでもない。詩抄卯集文政二 四十歳「迎母」の詩に、移寓就爽塏。將欲迎阿嬢。とある。阿嬢と云ふから若い別嬢さんのやうだが、實は本年取つて六十一歳の母梅颯である。それから此「移寓」が木屋町である事は、矢張り此年に「鴨河寓居雜詩」と云ふのがある。その始めに、欄于亞字俯晴灣。水淨沙明落照間。とあるので、木屋町の寓たる事が分る。詩抄は山陽生前手定の

隨筆頼山陽に就て

寛政三年改元後二十八年

ものであるから、年代に違ひはない。此時移居の作は、遺稿補遺にたゞ三首あるだけだが、小竹に「次  
韵子成園中雜咏十五首」と云ふのがあり、山陽の方のも外からぼつ／＼集められる。それ等を對照し  
て還元すれば、木屋町住居のさまがおぼろ氣ながら眼の前に浮んで来る。

「四十未成家」と云ふ支那で通有の古語がある。正味四十歳でやう／＼一軒の主人となり得、そこ  
に妻あり母あり門弟ある彼れは、四十年來層々相逐ふて來た窮苦と失敗との跡を顧み、此に始て人間  
味の温かさを感じた。山陽傳上より（もしくは山陽心理史上より）云へば、此の木屋町定居には大變  
重大な意味がある。年表。文政四年「春、木屋町に家を構ふ」とあるを、三年前へ引きすつて行つて  
いたゞきたい。餘談ではあるが、謙藏君の始て山陽塾へ來たのは此時で、謙藏君の親父さん春水とは  
年來の懇意でもあり、かた／＼此時十四歳の彼は、母梅颯と山陽とのお伴をして上京することゝなつ  
た。藩の領地ではあり、子飼でもあるから、母にも山陽にも一生謙藏々々と安つぱく扱はれ、子供の  
守りまでさせられて始終憤慨したものだ。

文政己丑（十二年、山陽五十歳、節庵二十四歳）贈風箏于頼郎君兄弟。賦此爲副の詩に兩々飛鳶  
翼纒成。鶴領原上弄春晴。寄言萬丈一絲絡。莫墜高風雲外聲。とあるのは謙藏君子守り生活の記  
念である。（風箏は紙鳶。此時支峯七歳、三樹三郎五歳）

〇歟山陽の暢寄帖此年廿二流布するも唐紙  
 大本冊子体装釘のふりて人多く之れを知り而して原  
 楊本の体裁紙質等と同一なる事但此帖を今仍  
 扱めて稀くして獲んとするも得可からず余昨日神田  
 の書店に初めと原楊本を獲りて實に余も之れ  
 を見たりと初め也此の原楊本は帳子仕立の幅  
 五寸堅二尺四寸許紙は奉書印刷頗る鮮明各  
 枚標紙を附し三帖とす目ら流布のふりて此  
 んに在る教等言し巻尾に原幅所花体是  
 あり収ある所の書は花者を記す今この流布本に  
 ありや否やを知らず奥付もなき

明治二己巳晚秋略筆上梓

長門 藏政局

全 十二年三月廿七日御届

全 年 四月 出版

新刻人 大政府平氏

岩井真二郎

東巴平氏竹二自

とあり此書は長篇に上梓せん後大改に上版を  
 なること見えし北大改版の長門版なることあり  
 此や余の未だ知らざる所長門の上梓トありとあり  
 十一年後出版せんこと出版法にどう届出を要  
 し長門出版帖ハ同一のものありとあり歟十  
 年を隔つと長也此のありとありとあり余の原

此と有すもの也。家老山陽二帖あり。此帖を以て  
権と云ふし。書翰帖も今ハ原楊本を獲ること  
難し。此者帖暢字帖といふを巻首に暢帖  
字感の山陽題詞あり。此の題字ハ原暢不  
花備房に授んハ内藤静修花本日と摸刻し  
也。此帖を屋中の書帖に置くべし。(十  
月十日記)

○愛媛外温泉郡興居島村田村昌ハハ未  
久ハ一書を寄せ。赤井土晦の事をいふ。曰く  
備中に赤井城園アリ。赤井彦七ハ(阿)あり。赤  
井土晦ハ此等と曰ハる。や否や。余未レ知ス也。  
此田村の花婿。暮庵後款に印。(公題)

(土晦)の四字あるものを存すこと其功を示す

宗子河車六之峰。山陰淡路

濃山園是。君家沈畫。諸深来。考出。悠

南宗。考唐點口口

此の書体と今ハ山陽風。うるといふ。善唐印土晦  
と云ふ言ふもむむ。余ハ此の筆の類也。善  
唐と思ひぬ。或は誤りも知んず。此来状  
と様と云ふ。十月十日記

○今日比谷園者。彼の施徳が年ハ入つ。以て是を測いし  
先の目に入つ。此のをゴルドン夫人折くの記事とある  
ル。こゝを讀んて。又人の折云が。六月二十七日。京都  
ホテルの一室に。七十四歳を一姫と云ふ。段し。此事

と此の如く夫人の志折は實に今も此の如くつらつらと歎か  
 戦の末次英本にあり婦子か出征して戦歿し此か  
 らとかまの情画し此其後再び日本に來ること  
 すら此の如くつらつらとあり自今も夫人の志  
 此無関心む打退れ此が一昨日早大の維持員今  
 臨ん此折今此を後切んとする圖書館の入口に  
 取付んとし長く仕舞ひ人びあつた羊の石像一  
 と人夫が大勢で軍撤汗を流して此夫人を思ひ出し此間  
 のを見し初め此方ふり此夫人を思ひ出し此間  
 る日比谷の施徳此其の跡を教へえられ自今も  
 夫人此一回か而令し此ことが無いが早大を此夫  
 人の重大な関係かあり夫人の大限を敬仰し



エリザベス、エー、ゴルドン夫人逝去

京都ホテルの一室で豫ねて宿病を養つてゐ  
 た、エリザベス、アンナ、ゴルドン夫人は、六月  
 二十七日の午前八時、あの静寂な七十四  
 年の生涯を終つた。同夫人は英國の貴族  
 ジョン、エドワード、ゴルドン氏の夫人  
 で、凡そ二十年前日本に來朝して佛教の  
 研究に没頭し、佛耶一元論などの著書が  
 あり、また高野山には夫人の書いた碑文  
 などもある。

日比谷圖書館の寄託圖書に Dulce Cor  
 Library のマークを貼附した圖書が多数  
 に藏されてゐる。これはゴルドン夫人が  
 英國の文化を日本に普及し、同時に彼我  
 の親善を圖る目的からその知人の間を幹  
 族して Dulce Cor Library を設置する  
 ために蒐集したものであるが、明治四十  
 年に至り高楠順次郎氏を介して、東京市  
 に該圖書の全部を委託すべく申出で、尙ほ他日  
 これがため一箇の圖書館を建設せられたきこと

と、當分の間日比谷圖書館で、その一部を公衆  
 の閱覽に供せられたき旨の願書を提出した。



照小の人夫ンドルゴ

東京市はその請願の全部をいれ、同年十月市  
 會に於て該圖書の整理その他に要する經費とし

て五千三百七十五圓七十五錢を議決してこれが  
 整理を行ひ、開館當日までに九萬九千九百六十  
 冊を收容したが、今日に於ては總計十萬三千六  
 百九十八冊に達してゐる。

この集書に屬する圖書の中には多数の複本が  
 ある。これ等の複本は府縣立圖書館の請求によ  
 つて、期間を限つて貸與することとした結果、  
 山形・茨城・山口・長崎の四縣立圖書館及  
 神戸市立圖書館にそれ／＼若干冊を貸附  
 けた。恚うしてゴルドン夫人は當に東京  
 市ばかりでなく、汎く一般の讀書子を利  
 したが、その功績に就ては知るものが甚  
 だしい。即ちこゝに哀悼の意を表すると  
 ともに特にその功勞を録する所以であ  
 る。  
 因に夫人の遺骸は六月二十八日午後二  
 時洛東の花山火葬場で荼毘に附し、七月  
 三日午後二時京都眞言宗總本山教王護國  
 寺(東寺)で佛式法會を營むだが、遺言  
 によつて追つて紀州の高野山金剛峯寺  
 と、朝鮮の金剛山長安寺に分骨埋葬する  
 由である。





競争のありきなきことありて是よりき、貴方が願ひ  
不利に陥るといふ仔細を一言に付て一人が高札の中  
札もあれと交放せしむ。開札の時他に競争かある時  
ハ最低價に賣れしむるの公習儀とありてあることを  
元書の悪弊を、貴方が云へば高札に賣れしむる  
かある心あるの札が、細紙に賣れしむることを、  
旧の時價あるものから、田位に賣れしむることを、  
貴方とありてある。これを貴方と商人の信用を  
害すことありて心ある書意を、之れを矯めんと試みて  
も微力に、節のよからぬ小商人ハ多敷び之れを、  
すまぬ。交易に此の習儀を改めしむることか出来ぬと  
いふ、自分の花を賣却し、正札附の目録を記すの事

此札大を廻りけん為めあり。

十月十一日記

○本の敬敷策中神田の山崎、左の書を得たり

一 解体新書

五冊

此書安永三年杉田玄伯の江戸に刊す  
る所、阿蘭陀解体新書の刊行ハ之れ  
を権輿とす。安永ハ天明の中間  
の年號を時代とし、當時此書の  
刊行ハ著者に権名を冠せざるを、  
傳ふる所と指す。云々ハ此書を知る  
行するハ先比、五七枚の解体圖を  
記し、讀之ハ世に聞ひり、時の政府  
も列國所をうしを以つるを、



この刊行といふ、此の試刊の書願  
稀に在りといふ、余未に見ず、此試刊本  
稀なるハ勿論、安永初掲本今日頗る  
稀也、今流布するもの重訂本として  
便に便するもの、原本の当時の面目  
を存するに及ばざるものあり、今日幸  
之んを獲得せしむるは、十月五日  
日記

一本別記名家著述書目録 一冊

文化年刊提綱の編纂所、いろは  
別りて昔著者と排列し流布本多し  
今日獲得せるは善本也流布本あり

五冊をえ取不便也 善本をい願る  
と誤者と考する也

○龍吟、意譯、直譯、義譯といふ通用語を  
いつ誰んか工夫せんか、今も考へ、此ことちその  
つら、杉田玄白の解體新書の凡例に或ハ  
こんか此を家の如きものあり、かと思ひん、三  
譯の解がある、三種の譯の内、今も意譯  
ハそのか、せんといふものあり、  
君龍吟といふものを  
の解といふものあり、その全文を

解体新書の序、長崎の名人吉雄耕牛の長文の前  
野玄洋と杉田玄白の功績を以て免れ稱してある。一讀の  
値あるものがあることを附記しておく。

○朝井御境の寸珍巻を燻ひ入る。此巻は堅守二三十分  
六羅漢と回す。各回甚に執政あり。吾も持て居す  
のあとを尋ねる。御境京都の西家小白山人と稱す

名を予祥といふ

○十月十四日浅倉屋を初めに群書を閲し左の三種  
書を得て納む。

一 老至筵小録 文化丑刊

一冊

此書小野、山岡、山八秩を壽す。時受  
業生、次史を授て刊行する所。巻首  
丹波元洲の序を載す。其山の七  
鉄を壽し、時平、木十、公考の著  
あり。其の例に倣ふ。此書あるを、吾  
陸平、公九十一の時、老至、御境、後、の撰  
あり。老密、ある、時、初、密、小  
讀の著あり。此書の名の由来、知る

べし、此書に載る所本名中歌問  
に属するものを解きしもの十種之を  
を愚得十款」といふ、別に奇説三則  
あり、權を解するものとあつて詳か  
る。此尾根元の各種を詠しこめたる  
和歌廿一首あり、又教首のものと  
花錦一首歌一首をも収む、これ又  
接しのことと見え、関するさくら  
研究の資料とすべきもの稀  
の也、さう

一 東叡山園

北の園湯崎切あり、岩田尾利兵衛

十二行

の板行あり、仁王門あり、中門あり、法  
花を常の臺を左にあり、互き多きを  
連接する、時橋あり、其下を流るるを  
壺に入る可し、大佛あり、一室あり、  
刑年よりけんも時代略と推し得べ  
し、丹緑彩色、よく保存せらるる園  
に實二十回

十二行

○備中・山陽の交あり、赤井か二人ありと云ふ、ゆゑに  
往て混する、一人は赤井士晦と名付、山陽門  
人、他の一人は赤井彦七なり、城園と稱す、山陽の  
山前中、北人の愛寵と云ふに不しかつたことが

千代の松山湯

三三 新井機園宛の手紙に

機園「新井彦七郎」

「新井機園宛の手紙に...」

「新井機園」

三三 少卿様へ

新井機園

新井機園

「牛部様へ...」

好尚書屋

「新井機園宛の手紙に...」

「新井機園宛の手紙に...」

「新井機園宛の手紙に...」

足は... 新井機園宛の手紙に... 新井機園宛の手紙に...

三四 同上

士海の倉敷し人也

「士海と揚南の言葉...」

「新井機園の同輩...」

「新井機園宛の手紙に...」

「新井機園宛の手紙に...」

「新井機園宛の手紙に...」





凡書契以來經史子集百家之書至於天文地理陰陽醫卜僧道技藝之言備輯為一書  
庶幾浩繁縉紳受命韓成上之賜名文獻

十二行

…意 見…

新築圖書館の建築に就て

教授 内藤多伸

御大典記念事業として多年我學園の懸案であり學徒の憧憬の的であつた大圖書館が愈々大正十四年十月二十日を以て落成、嚴肅莊重なる勇姿を現出し大學教育の中樞機關を確立するに至つたことは誠に祝福すべきことである。

昨年四月廿一日總工費四十萬圓の豫算を以て起工してから約一年有半

理事者の指導その宜敷きを得當面の關係者としては設計補助の助教授今井兼次君、實施に就ては本學技師桐山均一君及谷助手の諸君が日夜を分たす工を督し上遠組の熱心親切なる施工に依つて出来上つたもので、耐震耐火最新式の圖書館としては東洋隨一と誇つても差支へはないと思ふ。況んやその設計には本大學建築科諸教授の各専門方面よりの審與を得その衆智を集めたる點に於て全く他に比類がないと云つて宜敷い。

大圖書館建設の理想は可なり昔からのことである。大正六年私が米國留學の際一面圖書館の研究を兼ね彼地で多くの研究資料を集めて來た。その後圖書館建築委員會が出来、舊

恰も平靜な海と暴風雨に狂亂せる同じ海とを比較した時に前者がより遙かに多くの暗示を思索者の魂に齎らすと同じである、沈靜と黙止の状態は能く無限な味を含むものである事を忘れ度くない。外壁の仕上は圖書館の特質を顧りみ、平靜、清淨の意味より深奥な白色に近き材料の案出に盡力しその試験片を造ること數十回に及んだ。その材料及仕上方法は恐らくこの圖書館を以て嚆矢となすであらふ。それにつけても試験片の製作指導に努力せられた當事者の精力を多とするものである。

正面大立關側は大閱覽室採光用の五大窓(高さ十八尺)の羅列と出入口

の青銅色大扉を含む大壁面と前方の花崗石大階段とによつて主要部を形造られてゐる。青銅色大扉は「久遠」を表徴して宇宙を暗示せしめ度く思ふて立案されたものであるが一部未完成の部分は扉左右の斜壁内「パネル」に設置せらる、管の二個の彫刻(石)と共に完成の時期を待つ次第である。この二大彫刻に就いては

常大學建築學科講師武石弘三郎氏の腕に依つて豊麗な高肉彫りが製作せらる、豫定であるから建築物と彫刻との有機的結合に新紀元を與えらるゝことである。

洋の印象を辿り行かしてある。上部に格天井を頂く白色「ベルシエーブ」狀の六圓柱は砂壁を背景として前方頂光を浴びて輝く大階段室を守護する形となつてゐる、尙柱頭部に四個宛のモックスレイ・レフレクターを装置し柔らかな反射光線に依つて照明せらる、ものである。

大階段突き當り曲面を描く壁間には水平視線を越えて直径十五呎の圓型大壁畫の位置が用意され黒色漆塗額縁で圍繞さる五六時機を見て力強い壁畫を描きて教養の糧とも致し度いものであると思ふ。この大階段の晝光は天窗より探り夜間照明は硝子天井裏より色光を放射する装置になつてゐる。

大階段を迂回して昇れば目録室及借出室に導かれる、目録室中央より壁畫の位置を観るに最も佳いところと思ふ。これに隣つて圖書館の主要部たる大閱覽室がある、天井高三十

四尺の窮窿天井は生動的な力強さと安心とを傳へ一萬の若き青年學徒の研究の場所として最もふさはしからん事を期した。閱覽室三ヶ所の出入口上部「パネル」には常大學建築學科教授今和次郎氏に依つて模倣風の油繪を描かれる計畫である、尙出入口間の壁面には四個の藝術、哲學、科學等を表徴する丸彫り石膏彫刻を配置する案になつてゐる。

の窓硝子面積をもつのであるから讀書には十分である、夜間照明器具は室内の裝飾的方面を考慮して立案し家具としての學生用机、回轉椅子等と共に充實せしめてある筈である。

書庫は「ステール・スタックシステム」を採用し鐵骨に依つて組み立て其の鐵柱に書籍及床の荷重を存負はしめたる堅牢な構造で藏書の収容量の増大と云ふ點からも適當なものである。學生及一般閱覽者の入口は右側にゆつたり設け、下足は地下室で取り一階ホールからチャックされて二階の目録室に行ける様にしてある

又食堂は地下室に設け、館外に出ずるに食事が出来る様になつて居る。尙平面計畫上注意すべき點は新聞雜誌室を本館より除外したことである、これは舊書庫を改造し出入を容易に學生は單時間を利用して閱讀出来る様にしてある。

建物の構成に對しては終始無駄なきを期し機能の實現に重きを置き隨つて各詳細部に渡つて多少の變化律を織り込み視感感覺への愉快さを導く事にとめた。それから圖書館計畫の裡に最も注意を要する事は將來の擴張の事である、そこでこの圖書館に於ても第一期第二期の書庫擴張計畫の實施がいづつでも出来る様にしてあるので現在外觀に現はる、型態も自から「コンクリート」したものにならないので

ある。書庫擴張の第一期と云ふのは建物後部にある地下室共五階の書庫を更に二階分上方に増すことで尙不足を感じる次の時代には尙第二期計劃として更に書庫左翼部をも延長して行けばよいことになつてゐる。圖書借出室の位置が書庫の一方に偏せるはこの將來の擴張問題と考へた爲である。

閱覽室、圖書借出室、書庫のこの三者の關係は學生教授圖書館員の相互の便利のもとに圓滑なる連絡を必要とするものでつとめて各出入口、階段系統の統一を計つたのである。

高さ及階數

閱覽室側 地盤上より軒蛇腹上端迄五十二尺  
書庫側 指定地盤面より軒蛇腹上端迄三十五尺五寸

構造は物放された助教授村越安吉君が煩はし細密なる計算の本に充分安全に耐震的ならしめたもので主として鐵筋コンクリート造とし大閱覽室小屋組及書庫を鐵骨造としたものである。

昇降機

書籍運搬専用のも二臺を書庫内に設置す、共に電力使用のものである。

衛生及煖房設備

この裝置計畫は當大學助教授大澤一郎氏に依頼せるもので各便所は水洗式のものとし排水する汚水は悉く、中庭に設けたる汚水淨化裝置により濾過し下水に放流する様になつてゐる。

煖房裝置は「パキナム」式低壓蒸氣直接煖房方法として地下室に設置せる「ボイラー」より蒸氣主管岐管を以て各室内の放熱器に蒸氣を送り放熱器に依り室内を温むるもので凝結水を還水岐管及主管を通じ「パキナムポンプ」の作用に依り「ボイラー」に復歸せしめてゐる。「ボイラー」は「Pierce American」

電氣時計

電氣事務室に親時計を置き各階通じて四個の小時計を適當の場所に配置してある、電燈照明電鈴電話設備に就いて相當の裝置を施してゐる特に照明方法、器具に就いては新意見を計畫した

家具

拜啓新秋快適之候愈々御清榮賀上候陳者豫て深甚の御好意に相浴し候御大典記念事業の中心事業たる大圖書館の建設も昨秋以來銳意工事を進め居候處今回漸く竣成仕候と同時に製圖教室、學生ホール、野球運動場並に水泳場等何れも竣工仕候に付來る二十一、二十二の兩日御隨意御來觀願上候 敬具  
大正十四年十月  
早稻田大學總長 高田 早苗

校友各位

udroft, snockless, Ioler, 二臺、ポンプは「パキナム」式のもので最も新しき型式のものである  
各室の換氣裝置は自然換氣に依り各室に排氣孔を設置した而して書庫、大閱覽室目録室類は大體南北を軸として存在せる爲一層自然換氣によき結果をもたらすものと思ふ

大閱覽室、目録室、書庫内研究室、應接室、館長室、休憩室等のものは新匠に依るものである  
最後に附言して置こう  
大圖書館の建設に數十萬の財力を投げることは吾が學園にとつて少なからざる負擔であつたが當局者の高き希望と建設委員の學園擁護の愛にほだされし

不斷の努力に依り更に數萬人の工人の力を之に併せて學園の人に之の捧げものとして創り出された共同作品と云つて宜敷い斯も有意義なる途を辿りつ

校

臨時評議員會

九月二十六日午後三時より大隈會館に於て臨時評議員會を開き維持員一名の補缺選舉を行ひ、尙ほ學校當局より各種の新施設及び事業その他校務の近況につき具さに報告をなし及び新選の維持員左の如し。

出席者

- 高田 早苗 石澤 愛三  
池田 龍一 原田 駒之助  
五十嵐 力 西尾 謙吉  
長谷川 誠也 都倉 義一  
星野 治作 大橋 誠一  
徳永 重康 若林 成昭  
沖 謙 渡邊 徳衛門  
渡邊 徳衛門 金子 馬治  
上野 富之助 吉田 秀人  
田中 穂積 高杉 龍藏  
高橋 清吾 名取 夏司  
坪谷 善四郎 中桐 確太郎  
中野 禮四郎 中島 半次郎  
難波 理一郎 氏家 謙曹  
村井 五郎 伯野 松平頼  
増田 義一 男爵 前島 綱  
前橋 孝義 長田 文次郎  
煙山 專太郎 小島 元彦  
小林 久平 寺 尼 元彦

報

落成せられしことはこの上なき歡びである、而して設計計畫に直接關與せる人々は何れも學園に生を享けし人達であるとも亦喜びに堪へぬ次第である

教授會

政治經濟學部 九月十八日午後三時に教授會を開き、二階堂講師逝去に付、統計學講座を本大學教授小林新氏擔當のと、其他を議したり。  
文學部 九月十六日午後三時開催、露西亞人並に中華民國人の入學志望者に關すること、及び文學科の文學通論を本學年中休講すること等を協議したり。  
大正十四年七月各學部  
未了及未濟試驗卒業者

政治經濟學部政治學科

- 氏名 府縣 氏名 府縣  
今井 龜雄 千葉 相馬 安雄 長野  
久原 光一 佐賀 謝 國 文 臺灣  
岩崎 録 平 靜岡  
同上 經濟學科  
大畑 檢彦 大阪 神野 環 栃木  
金谷 順四郎 群馬 中野 哲次郎 福岡  
中島 象一郎 東京 上村 謙 東京

大成既而上悅其書尚多未備復命重修以  
太子太師姚一廣一孝刑部左侍郎劉永竹虎及縉  
德女事以子士王日京主幸 琴酒胡儀洗馬  
楊濤儒士陳濟為從裁侍海鄰得等二  
十人劉之簡中外官及四方方老需有文云





ハ何れもあらずか。謝肇淛云く、甘蘭能好婦人但  
恨非膏重之物矣とあり、其の婦人を好むといふ  
も、或ハ婦人頭髪の油を以つて其の葉を麻子  
十んハ先汗を生ずるを以つて云ひ来りたりか。五施題  
養の蘭法の内云く、清晨須用柳髮油垢を手  
摩弄之。得婦人手尤七佳矣。故俗謂甘蘭好  
淫也云こと以つて徴すべし。古支那婦人に甘蘭を佩  
て飾とすも、後世も有りし。為りて甘蘭に蘭して性慾  
的ローマンス也あり、五雜俎の曰く、條云く、古者  
女子佩甘蘭、故内則曰、婦或賜之甘蘭、則受而藏諸  
罍、媿也。蓋姑夢天其已甘蘭、文公遂其之甘蘭而  
御之と也あり、○蘭の傳文の媒と為しること見る

一、尚淮南子：男子植蘭美而不芳、亦情不相  
與、往來也。と云へり、○蘭婦人を去るにふと云ふ、俗説  
の起りたる所以歟、何れも此の俗説の未由き久  
しいことと云う

十月十日の記

○蘭に乗して櫻陰齋談を讀む、同文、体  
故予の考証を録し、予の考証中：烟苔に蘭す  
此一節あり、乾中一二を抄す

烟苔の正名、現煙の名あり、此の名の由来、乾き時  
珍食物本抄信目云

相傳海外有鬼國、彼俗人病将死、即解置深  
山、昔有四王女病革、棄去之、昏憤中、蘭苔  
馥之氣、見臥傍、有叶乃就而嗅之、便覺

偏体清涼、霍然而起、奔入宮中、人以為異、  
因得其狀、

烟者、禮後、生し来る甲、すま、後、と名、見るべき、  
也、

烟者、の功能を、極、方、言、ひ、あ、ら、う、し、る、ま、あ、明、の、  
吳興の沈穆石、魏氏、撰、す、所、本、竹、洞、詮、才、九、  
、曰、く、

烟草一名相思草、言人食之、則時々思想不能  
離也、味辛、氣温、有毒、治寒濕痺、消胸中痞  
隔、痰塞、開經絡、祛滯、人之腸胃、筋脈、惟喜  
通暢、煙氣入口、直循胃脈、而行、自內達、外、四  
肢、百骸、無所不到、其功有四、一曰醒、能使之醒、

蓋、火、氣、薰、蒸、表、裏、皆、徹、若、飲、酒、出、二、曰、醉、  
能、使、之、醒、蓋、酒、後、吸、之、心、寬、氣、下、痰、餘、醒、  
物、解、三、曰、飢、能、使、之、飽、四、曰、飽、能、使、之、饑、  
蓋、空、腹、食、之、充、然、氣、盛、如、飽、飽、後、食、之、  
則、飲、食、快、然、易、消、人、遂、以、之、代、酒、代、茗、終、  
日、食、之、而、不、厭、也、云、云、

烟者、種々の名を命す、金絲烟といふ、其の如く  
キ、セ、ミ、ル、形、を、命、し、る、を、見、返、魂、烟、ハ、前、掲、の、コ、  
、コ、ン、ト、ス、と、し、来、る、を、見、換、不、帰、と、い、ふ、ハ、伊、呂、波、の、盛、  
を、見、る、を、見、返、品、の、を、見、る、を、見、南、寧、草、と、い、  
ふ、産、地、を、見、る、を、見、淡、邊、姓、を、以、つ、て、此、州、を、服、  
して、病、を、治、し、得、る、女、人、の、名、と、い、ふ、を、見、る、を、見、



かてこひのちのうらみは編者なり  
 花向くいと入りてくさくは後世なり  
 うつろを人のあてきとそ見し  
 炎さくらとりんる茶もる大輪の  
 やへにひらけるそとこききりけ  
 いとをを定うへふすんいろも香も  
 かせ終七若くく采えりこきすれ  
 こん寶曆御旨の東山の詠する中身といふ  
 近年三好孝博士撰と稱究一つ多く撰出を  
 集むると不知る此二十一首をぬちる至聖心選小  
 讀と花すもや否や  
 十月十日  
 東山の友人敬高といふ人る三句の長歌に二十

三種の撰品をよむるに、至聖心選の巻末  
 に收めあり、各種の特徴をよむるに、東山  
 のと同じ、本書に就て見ふに、  
 ○五山遺稿の巻首に收ちる遺稿左の如し

撰定中秘萬物に及ばず地味香候月形瓶華はや子用秘録亦去固そ人共の昇道  
 揚右中秘萬物に及ばず地味香候月形瓶華はや子用秘録亦去固そ人共の昇道  
 勝温池七家茶室并等免文殊其の六字を人許認め不出著吟惟摩口擁  
 可物不經一段意入詩中、必有天聖法隆唐片士修の室現出八首由句隔山道  
 人又存廢七名如何信の向人説無旺世故、直向并宿頭自前中妙能諸天修綱  
 或平甲、百千在佛中、他回香南平、少香、抄、佛、表、て、女、本  
 此年十六年正月、山、月、子、修、中、秘、萬、物、に、及、ば、ず、地、味、香、候、月、形、瓶、華、は、や、子、用、秘、録、亦、去、固、そ、人、共、の、昇、道、  
 揚、右、中、秘、萬、物、に、及、ば、ず、地、味、香、候、月、形、瓶、華、は、や、子、用、秘、録、亦、去、固、そ、人、共、の、昇、道、  
 勝、温、池、七、家、茶、室、并、等、免、文、殊、其、の、六、字、を、人、許、認、め、不、出、著、吟、惟、摩、口、擁、  
 可、物、不、經、一、段、意、入、詩、中、必、有、天、聖、法、隆、唐、片、士、修、の、室、現、出、八、首、由、句、隔、山、道、  
 人、又、存、廢、七、名、何、如、信、の、向、人、説、無、旺、世、故、直、向、并、宿、頭、自、前、中、妙、能、諸、天、修、綱、  
 或、平、甲、百、千、在、佛、中、他、回、香、南、平、少、香、抄、佛、表、て、女、本、  
 梅、金、五、十、四、第、四、回





淨真寺、下毛郡下郷村大字樋山跡、在ん小寺、  
朝吹氏、旧村大字宮園、出身其生家ト淨真  
寺、距離、四五町の如ナレ、此寺、雲華上人、  
住持トシ、寺、ト云々ト

抑も山陽が耶馬溪と通行セリ、豊後國日田  
郡隈(當時日田町大字隈なり)所ニ在リ、廣  
瀬淡窓の咸旦園(淡窓の塾の名)と訪い、夫よ  
り豊前國下毛郡永添村古城正行寺(當時  
鶴居村大字永添なり)ニ雲華上人と訪い、安達中  
山國谷と通行セリ、山容水態の奇絶と激賞セ  
らる、上人、更ニ山國谷より優房なる奇絶怪  
絶の所と案内ス、トて宇佐郡麻生村上麻生

の仙岩山ニ案内セリ、山陽甚だ僻い所、遂ニ上人と  
ト再び山國谷ニ入り、羅漢寺ニ宿し、翌日、本溪と潮  
リ淨真寺ニ宿し、而シテ翌日、古城ニ歸し、  
貴下が別府から耶馬溪、行く、この入口、近き所  
ニ淨真寺といふ、真宗の寺が、此寺、亦モ山陽が  
莫逆の交りトシ、た、傍、雲華の住、此寺、  
つ、が、是、河邊、古、城、の、正、行、寺、と、指、し、た、ら、  
淨真寺と、つ、を、正行寺と、訂正、す、ん、バ、何、等、の  
誤、り、も、な、く、又、雲華、上、人、が、山、陽、に、在、り、  
と、観、賞、セ、り、た、様、に、書、か、れ、る、が、木、に、  
な、く、上、人、仙、岩、山、と、案内、し、た、け、れ、ど、山、陽、が、  
再、び、耶、馬、溪、に、入、り、た、ら、な、い、



正行寺八下寺四ヶ寺と指し門徒三千七あり大  
谷紙九州第一の巨刹なり

○昨、徳田の書店に左の一冊を購ふ

一 火浣布畧説

一冊

の秋の版 平賀鳩溪の著す所卷  
首桂川四刻の序あり 上半火浣布  
の支那諸書にありんが考証をも  
本付西洋のこころも及ぶ 下半鳩溪  
の心上説を採るも海日左留の支那  
高に示し以て世傳文書を収む、二  
枚の繪あり、其法を解かざるハ貴

十三行

憶るんも此玉の頭々稀敷のよのと  
なり、江戸須原屋市兵衛の刊版也  
價十五圓 十月十日記

○山陽の雲蓋山作を付あて八人山岸理多良の  
家、有し其際の本畫巻ハ作敷字を以  
り回南也 其裏とあり、まゝ記す此巻の前  
に在り山陽の詩畫ハ兒をも七幅影をすの  
漸く成る乃ちこゝに収む、前の記をも巻を配  
す

十月十日記



○此三四りの早稲向の天地も、秋の振いひあつた  
早大の任事より、國有故其他の建物が出来上つた  
の、國有故の子供や、客の宿るの招待會や  
お祭り、種々をやつてゐる側より、杜撰で  
ゐる早大と慶應との野球會、金と復讐  
して、二〇二五の早大の跡に帰し、全市の田視  
を度々集めた、國有故の建築も、自分も  
係が深い、帝即位大典を記念する、五  
前、自分が主として其衝にあつた、三十萬の資金、  
附を募つた、其成績が、あつた、二十、六十、  
度、幕を捲いた、國有故の、恩物、  
も、記念、業、外へ、こと、思、  
十二行

決、早く成つた、行、の、中、新、大、  
布、の、高、等、各、改、を、改、く、こ、急、  
め、國、有、故、の、建、築、を、後、に、年、に、  
此、間、十、年、の、建、築、を、後、に、年、に、  
しい、者、の、現、況、を、こ、急、に、  
へ、見、え、乗、せ、て、新、改、改、の、日、  
の、扱、り、を、し、た、こ、急、に、七、年、  
く、こ、急、に、あ、つ、た、こ、急、に、  
城、の、地、を、買、つ、た、こ、急、に、大、  
か、つ、た、折、角、に、畫、一、に、大、  
建、設、七、切、控、の、地、を、買、つ、た、  
づ、地、を、買、つ、た、こ、急、に、  
今、日、も、三十、萬、の、

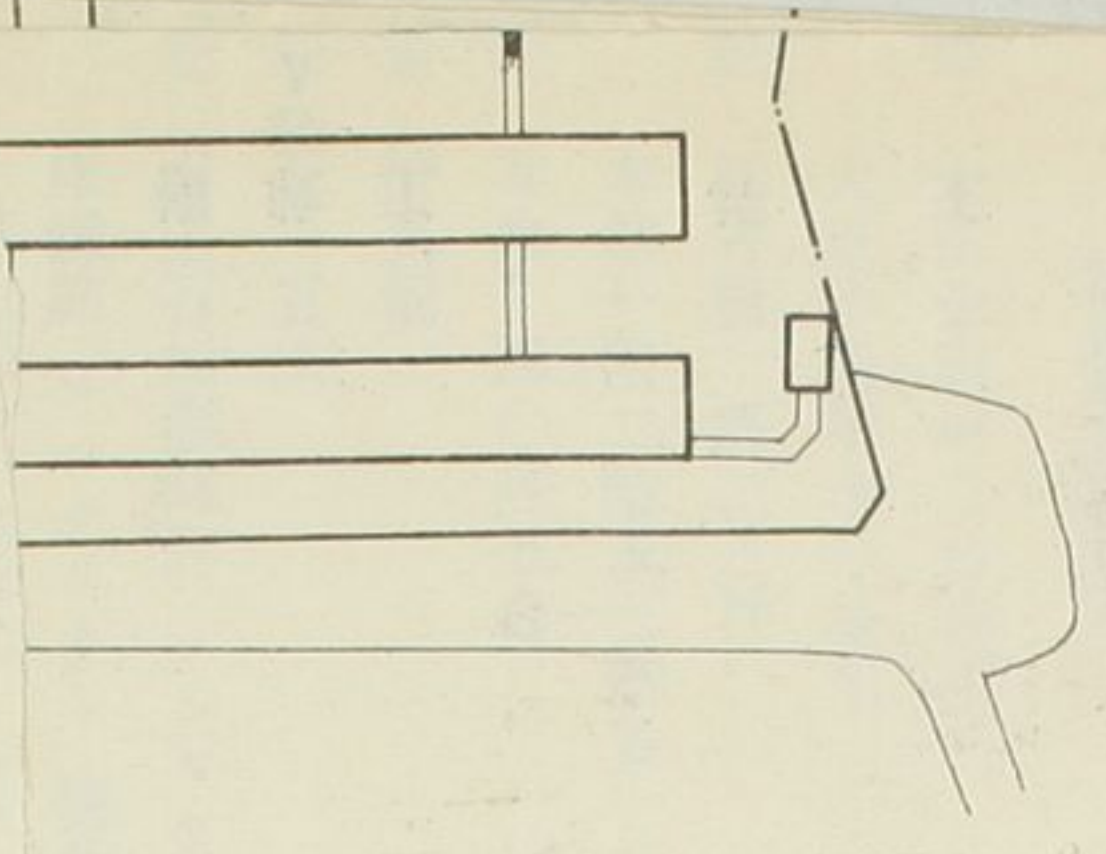
祝撰むるも、是にて或信す祝撰より此為の二曲  
ひ全郡完成す事得て行かば先づ五十萬の財  
かりひ出来たる丈のこともやり、此の他は二期あるこ  
と、さうした、保し此の故の出来たるを、何れも自分  
ハ満足に感した、其の實は、寛文後早稲田大工にて建築  
匠をよつた、保し此の故の出来たるを、何れも自分  
中にも不始の私を信せしむる、清く正しきこと思  
ふ、直る、特におぼれ、此の實は、寛文後早稲田大工にて建築  
動情のスタン、寛文に焼けた此科のうボラトリ  
一の復興、日しく、寛文に焼けた此科のうボラトリ  
壁の復興、日しく、寛文に焼けた此科のうボラトリ  
と保し、此の三年間に

ついでとある、此等、此等の例から、此等、此等の  
物の、此等の例から、此等の例から、此等の例から、  
此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、  
漸やく、漸やく、漸やく、漸やく、漸やく、漸やく、  
位置か、位置か、位置か、位置か、位置か、位置か、  
路か、路か、路か、路か、路か、路か、路か、路か、  
である、である、である、である、である、である、  
其の、其の、其の、其の、其の、其の、其の、其の、  
任を、任を、任を、任を、任を、任を、任を、任を、  
此が、此が、此が、此が、此が、此が、此が、此が、  
特著、特著、特著、特著、特著、特著、特著、特著、  
此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、



ことを主張したが、その通り出来て臨る便利は、  
 彼全体の係強を待せし其道の内、若手士が、  
 弊より、申分を、内部の、  
 内、後、所、此、卷、の、前、の、方、に、  
 瑞子に、乳、二、三、を、云、く、の、書、物、室、の、  
 の、石、像、が、あ、る、の、を、ゴ、ル、ト、ン、  
 念、物、が、あ、る、羊、の、書、物、に、  
 順、の、石、像、も、あ、る、此、の、石、刻、の、  
 此、の、皮、肉、と、云、く、ハ、皮、肉、  
 有、る、六、本、の、田、柱、を、白、雲、  
 官、の、海、田、の、  
 此、藝、術、的、プ、ラ、イ、  
 の、ド、と、其、の、  
 の、成、と、  
 十二行

七

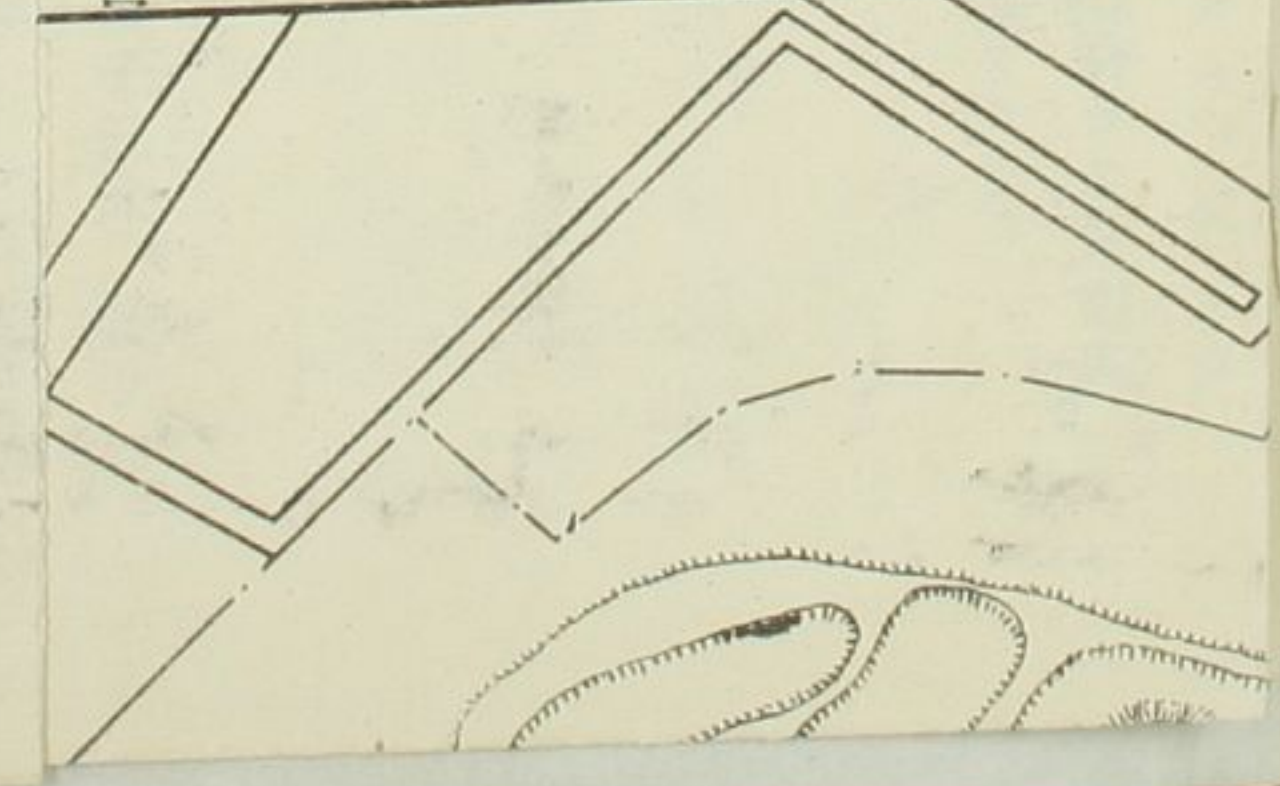


七坪五合  
ト「連続基礎

工	坪	工
程	程	程
大正十四年八月起工	大正十四年八月起工	大正十四年八月起工
大正十四年十月竣工	大正十四年十月竣工	大正十四年十月竣工
四〇〇坪	四〇〇坪	四〇〇坪
(更衣場其他附属建物ヲ含ム)		
費	費	費
三萬圓	三萬圓	三萬圓
水槽ハ鐵筋「コンクリート」造リ幅員	水槽ハ鐵筋「コンクリート」造リ幅員	水槽ハ鐵筋「コンクリート」造リ幅員

五、新プール

通路ヲ取り各腰掛ニハ番號ヲ付シ  
 「ンド」ハ甲乙丙三個ニ分チ、六間  
 口ニ三個所、外野出入口ニ二個所



### 新設備ノ概要

#### 一、新圖書館

工 程 大正十三年四月起工  
大正十四年十月竣工

坪 數 延坪數 一、一九五坪

表三階書庫五階(開口十八間奥行十九間)

閱覽室 一三二坪

書庫 四〇五坪

其他 六五八坪

工 費 四拾九萬餘圓

收容人員閱覽室 五〇〇人

構 造 近代式鐵筋「コンクリート」構造

特ニ書庫鐵骨鐵筋「コンクリート」構造

床鐵筋「コンクリート」構造

壁體鐵筋「コンクリート」構造

屋根鐵骨銅板造リ

館内設備 第一階ニハ廣間、應接室、事務室、館長室、研究室、參考品陳列室等アリ。

第二階ニハ學生閱覽室、目錄室、貸出室、教員休憩室等ヲ配置シ。

地下室ニハ暖房氣罐室、職員及閱覽者食堂、製本室、小使室、倉庫等ヲ設ク。

書庫ハ本館ノ背面ニ在リテ五階トシ、其内部ニ教員研究席ヲ併設セリ、其ノ屋上ハ平面ニシテ展望及休息ニ便セリ。

藏 書 (大正十四年九月現在)

總數 一一一、六九九部、二七七、四二八冊

和漢書 六一、〇一六部 二〇六、一九七冊

洋書 五〇、六八三部 七一、二二一冊

目 録 和漢書分類目錄

和漢書書名目錄

洋書著者名目錄

洋書件名目錄

圖書ノ増加 最近五ヶ年間ノ増加數

六〇、六八七冊

大正十三年度ノ増加數

九、七六二冊

工 程 大正十四年二月起工

大正十四年十月竣工

坪 數 延坪數 四二二坪

本館一階二階及三階各一二七坪五合

其他 四〇坪五合

工 費 拾萬圓

收容人員 七六五人

構 造 大玉石地形鐵筋「コンクリート」連續基礎

床鐵筋「コンクリート」構造

壁體鐵筋「コンクリート」構造

屋根鐵骨鐵筋「コンクリート」構造、防水層ヲ施シ

互砂利焼付ケ

室内設備 室ハ八室アリ、教室、講師室及事務室等ニ分レ、

一馬力「ポンプ」ニ依リ屋上貯水槽ニ導キ各室手洗

所ニ給水ス、便所ハ汚水淨化装置ニヨリ淨化シテ

下水ニ放流ス、電灯總數二百八十七個、三階ハ講

堂ニ使用スルタメ特ニ「グローブ」ヲ使用ス。又各

室壁掛形放熱器ヲ設ケ蒸氣暖房装置ニヨリ保温

ス、換氣ハ一階二階自然換氣トシ、三階ハ特ニ除

風器ヲ取付ク。

三、新學生ホール

當ホールハ一般學生ノ爲メニ二階ヲ食堂、二階ヲ集會所學生

健康相談所トシテ開放スルモノナリ。

工 程 大正十四年四月起工

大正十四年十月竣工

坪 數 延坪數 二二三坪七五

一階一〇〇坪

二階一〇〇坪

其他二三坪七五

工 費 七萬五千圓

收容人員 五〇〇名

構 造 割栗地形

床鐵筋「コンクリート」構造

壁體鐵筋「コンクリート」構造

屋根鐵骨ノ小屋ヲ組ミ赤瓦ヲ用ヒ引掛棧トス。

室内ハ温水暖房ニシテ鑄鐵製「アルコラ ボイラ

ー」ヲ一階ニ据付ケ又放熱器ハ廊下便所ヲ除ク各

室ニ設備セリ、一階ハ學生教職員ノ食堂トセリ、

配膳室ノ一隅ニ「リフト」ニ臺ヲ設備セリ。

又「タンク」ヲ屋根裏ニ設ケ「モーター」ニ依リ吸上

ゲ各所ニ給水ス。

便所ハ一、二階ニ設備シ、建物後方ニ「セブチツ

ク、タンク」ヲ設ケ汚水ヲ淨化シテ下水ニ放流ス

附屬建物ハ料理場ニ使用シ、廊下ニヨリ本館ト聯

絡セリ。

#### 四、新野球場

工 程 大正十四年六月起工

大正十四年八月竣工

坪 數 球場延坪數 四、二八六坪

スタンド觀覽席 九〇〇坪

スロープ觀覽席 二五〇坪

フィールド 三、一三六坪

工 費 七萬圓

收容人員 二二、〇〇〇人

構 造 鐵骨構造及鐵筋「コンクリート」構造トス

場内設備 「スタンド」前面周圍ニハ金網ヲ廻ラシ、選手控所

ヲ「コンクリート」ニテ作ル、

「スタンド」ノ最高ハ三十七段アリ、腰掛ハ長六尺

ニシテ五人掛トシ、腰掛ト腰掛トノ間ハ巾一尺ノ

通路ヲ取り各腰掛ニハ番號ヲ付シタリ。又「スタ

ンド」ハ甲乙丙三個ニ分チ、六間道路ヨリノ出入

口ニ三個所、外野出入口ニ二個所設ケタリ。

#### 五、新プール

工 程 大正十四年八月起工

大正十四年十月竣工

坪 數 四〇〇坪

(更衣場其他附屬建物ヲ含ム)

工 費 三萬圓

構 造 水槽ハ鐵筋「コンクリート」造リ幅員十三米、長サ

二十五米ノ矩形ニシテ「コース」六ヲ有シ水深ハ東

端ニ於テ五尺西端ニテ七尺、西端ヨリ二米ノ最深

部ハ十一尺トス。

周壁ハ水面上ニ一尺五寸ノ高サヲ有シ、上縁及ビ外

圍傾斜面共人造石洗ヒ仕上ケ水面上ニ一尺五寸通リ

「タイル」張り付ケ、其他水中ハ總テ防水「モルタ

ル」塗仕上ゲトス。

階梯ハ兩長側面ニ各々二ヶ所ヲ設ク、

水槽北傍ニ深サ二百三十八尺ノ堀抜井ヲ設ケ「モ

ーターポンプ」ヲ以テ給水スルモノトス。

飛込臺ハ一米及三米ノ二個ヲ設ク。

更衣場ハ木造平家建ニシテ百餘ノ戸棚及浴室、「シ

ヤワー」等ノ設備ヲナス、又水槽ノ南側ニハ「コ

ンクリート」造リ長サ四十九尺、高サ五段ノ「ス

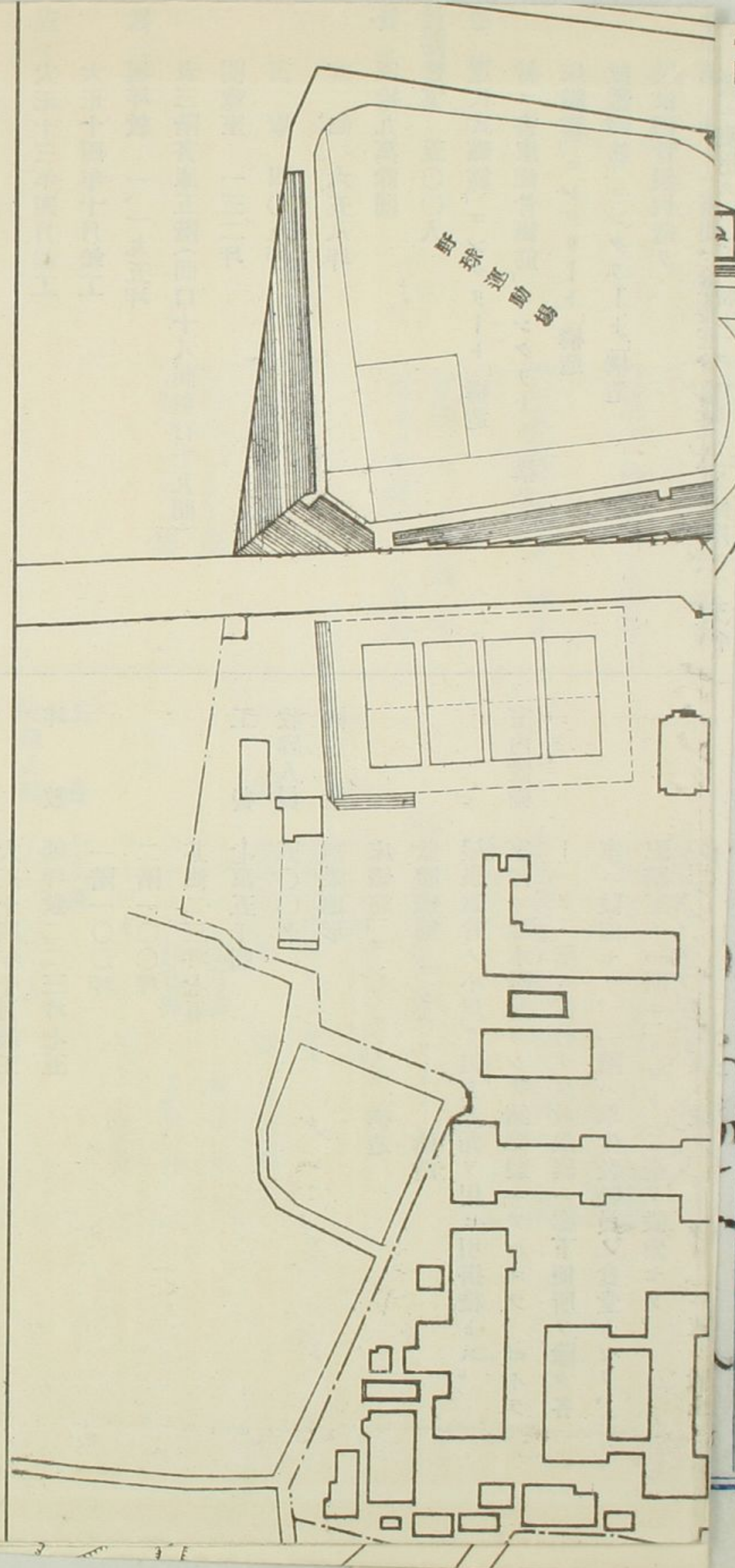
タンド」ヲ設置セリ。







ことも主張したか、その通り出来て臨む便利は



其の二の三を付いたもの、その中にも何れも其の苦心を妻に語りつたといふエピソードもある、此の式典を概してその間の回者陣列をやつた順序に「小室ニ自分の寸論をの陣列をやつて見れば、二る九點を「示して、その位置をぬいさる位置にあつた、豆本はかりとコンナに陣列したのを、此が初め、観衆の興味をそつた後、あつた、十月廿二日記  
 早大の以上の話より、後成と世に命を大隈急疾記念大講堂の建設する外、らんり、其の土地を圍むをり、其の園もあつた、出来た工事は多分、今年一月頃から初め、あつた、  
 震災前より、その費用をうけを、



つを録し以てといふ十数名の書意高と改とあり  
又内二人曰く實にエライ業業あり、多くの坊を  
くまを人を入るが、**○**者りるる、これ人**○**の  
を括む程の景氣ありとわく、**○**といふ、**○**正  
價目程にあること故、**○**の物りといふ、**○**  
早く直名を買人定まうる、**○**次身と平山を  
語ふ、**○**も多るる、**○**余ら目録印刷後  
二三價の片方の若し廉に失するものを引ふり  
と平山を、**○**念々、**○**現に、**○**  
表の版、**○**を、**○**外すこと、**○**  
といふ、**○**の、**○**状況、**○**  
より、**○**即ち

るん、**○**を、**○**品、**○**  
ま、**○**、**○**、**○**  
き、**○**、**○**、**○**  
已、**○**、**○**、**○**  
**○**、**○**、**○**、**○**  
を、**○**、**○**、**○**  
親、**○**、**○**、**○**  
い、**○**、**○**、**○**  
く、**○**、**○**、**○**  
立、**○**、**○**、**○**  
試、**○**、**○**、**○**

をかくはるも二割の引けを腹中へ置きおこしし為め  
値こさくことあり少のりて、借と二割を引けば損失を  
生ずることあり、何れも目録の印利終るる上  
のちよも一かゝり、昔の愛憎の情に依りて、  
あり、兎角執味家の抱名を俗商理解し、  
必此者の誰れも并せず、神慮と特殊の興味あり  
ことなきハ勿論、つらき多、ぬきの際一息ありし  
るを誤信し、つらきあるに余の不利、すすらさ  
を、七合、飾りし種々の情を説明し、そんを  
よ、山中、愕然たり、よのあり、余、黙んて云  
く、此者、主を、慈悲者、愛する、而も余の抱名、  
贖物の一、此、た、かるきを、保証す、比、坊、て、云、

贖物ありは、其の他人の抱名、慈悲家の名を以  
つて、愛するもの、不正の抱名、人知らず、之れを、  
實ハ慈悲の言義、こゝに、没す、氣と、毒の、  
といつて、一、笑す、願ふ、此、毒の、  
既、鳥有、く、属し、お、つら、る、ん、  
全、價、廉、あり、損、失、多、  
ん、て、る、る、あ、り、多、く、の、人、  
を、愛、し、つ、る、を、例、と、す、  
ハ、苦、痛、に、お、お、る、も、  
花、者、の、存、名、  
そ、ん、自、か、ら、不、利、を、招、く、  
の、名、を、持、て、ん、歎、

十月廿三日記

○徳川時代に新年々首種々の配りよをしいたえん  
い多く自家唐先であるが、年玉といふは托して自  
家の唐先をすゝものだから、その唐先匠がうけんはさ  
ぬ、即ち人を望むる故向が要る所から、滑然若  
妖禮を弄りし徳をも揮ふこころさるる、昔の故向  
を勿論とすましくひあるが、目出度唐先味か思ふ  
ある、此頃のこのいと通つてさうく精細に刻し  
たよの彩も色々あり、袋紙も色々彩而入が一寸  
よ、き味かあつけんも多々く、い友故とさうる、葉  
とん今保存せんてのる、この名とあつた、とよ  
備に獲た、この元、口、口の極の、年代の花いよ  
であるが、幸に徳川器具足してあつた、この十の極

本もこのうすことか出来、四もさ、式、三馬の  
撰ひ、西の一枚、ハ芳気、他の三枚、四、左の女  
は、故向の、左の女

一十六梅

表紙、梅の折枝と、鴨の彫刺、梅の  
一、七、あり、針斗を、一、隅、に、画、し、七、御、年、玉、と  
書、し、本、町、唐、三、馬、持、取、と、ある  
中、味、の、梅、に、ち、ま、の、か、酒、を、な、十、六、を  
け、さ、え、く、結、ち、り、ぬ、六、に、似、て、を、と、さ、る  
この、う、う、三、馬、唐、の、江戸、の、あ、と、い、ふ、白、粉  
下、を、さ、り、り、か、か、と、一、隅、に、さ、の、唐、先

載せり 又之ニ在成十其の年節あり  
これに彩をりし 臺物く不体と勿  
体ぶつとある 四頁の繪

一 七人猫女

これを標あにこそかありの酒樽を  
し、中の七人の女性をかくの酒の癖  
を画し且つ狂文を綴りてある  
四頁の画

一 賑やかなる福はさき

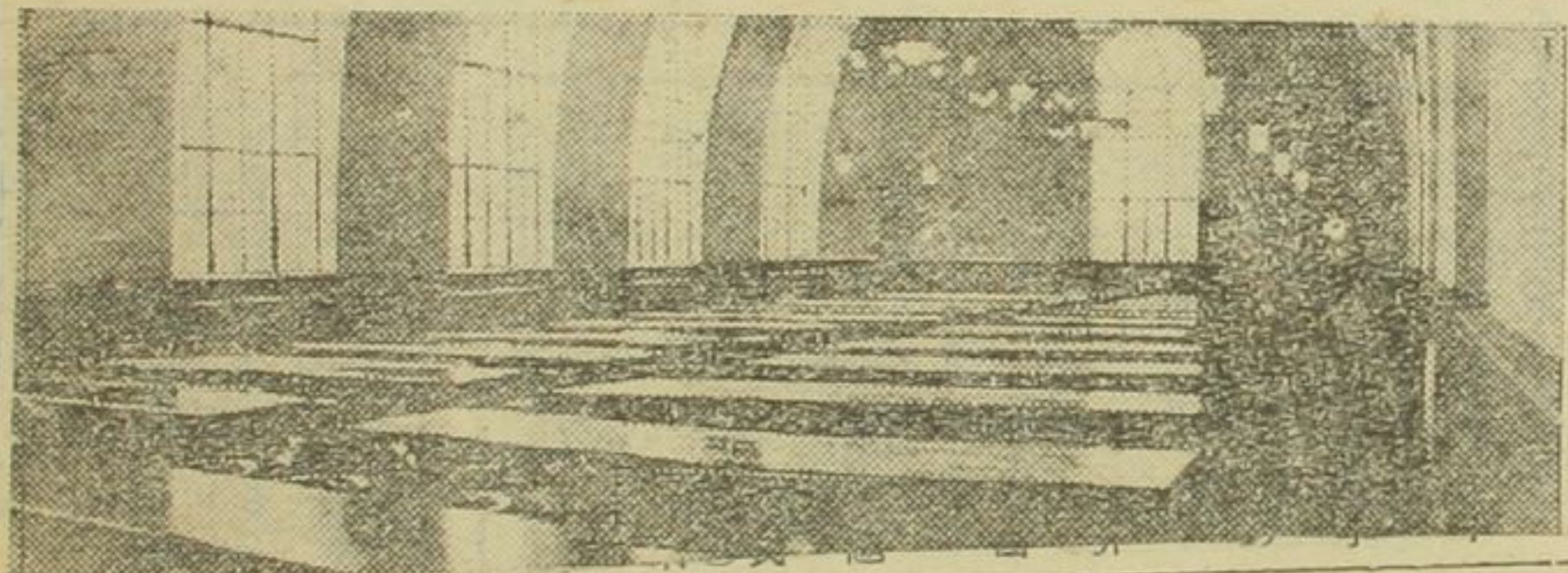
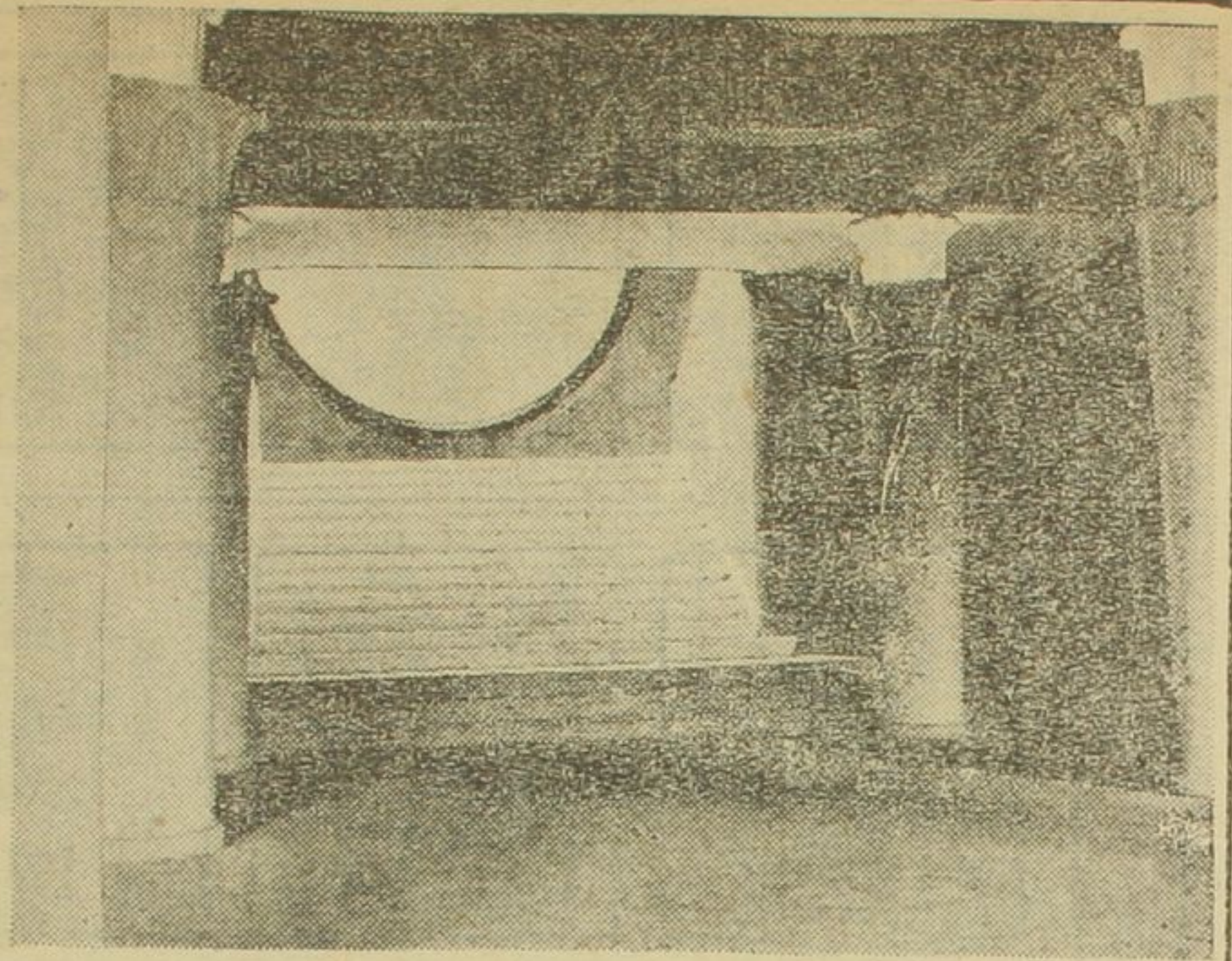
この表紙も自家の心合巻くさき

紙の一枚を刷つてをその紙の裏に  
表るとして細く小判を載せたる傍に  
福助の図あり 内部の蓋の彩を  
用ひて双六に托し各様に粧るを  
霞骨に紙に綴りたるを定儀と  
し、四頁の画

一 かけ合問巻

表紙の繪は連環と相めりて中  
彩もある同じ絵向の繪をりし例儀  
の似顔をも同形の紙に画し、その  
紙が円形を十六に割りたる地紙の

讀書ペーヂ



新築成つた早大図書館、  
トは入口、下は閲覧室

外面からは一見何の奇もない建物のやうであるが、内部に入るとかなり斬新な意匠を凝らした點が少くない。變化が調子に調分が苦味したものである。まづ壁の色からいふと、濃淡さまざまなかっ色、濃い緑色、純白色がそれ、調和を保つやうに配合されてゐる。閲覧室の天井及び壁は特に落ちついた気分を出し、又採光を良くするために、極めて薄いかつ色を帯びしめてある。それから館内に用ひてある大小すべての金具は、青銅そのものか、然らざれば人工的に青銅色を帯びしめたものばかりであつて、黄色に輝く黄銅などは一切これを避けた。これはいふまでもなく曲線も莊重さの味を出さなうがためである。

その他細部に就いていへば、一本の柱、一個の電燈、一枚のドア、脚のイス等にも、余り世間に類のない、獨得な意匠をこらしたものが少くない。例へば學生入口から二階の閲覧室に上る階段にある六角の柱の如きは、コンクリートの小石をそのまゝ露出させた上に、かつ色のペイントを塗つて、一種

圖書館として是非とも必要であるから、今後できるだけこの方面に努力したいと思つてゐる。

共同生活の二中心

第二に、私は圖書館をして、學校といふ一つの構成社會における共同生活の一中心たらしめたいといふ希望を有つてゐる。學校殊に大學の生命は研究にあるとちろんであるが、しかし研究のみが學校社會の唯一の生活ではない。吾等は研究と共に楽しく愉快なる集團生活の諸相を、できるだけその中に充實發展せしめたい。この意味から私は圖書館の中に常に楽しく、しかも静かなる、心持が廣く、深く、かつのびやかなるやうな空氣をつくつて、教室内で望み得られないある生活を、館内に營むことができるやうにした

いと思つてゐる。無論これには設備といふ問題にも關係するが、しかし吾々管理者が常にこの心がけを以て努力するならば、必ずしも難事ではないやうな氣がする。私はさしあたり右の二つの方針に向つて努力をつくすつもりである。

上て運轉し得る仕掛とさうする、その十六で劃し得るさうして迷と解とあり、皆滑然たるを控めておふことハ芳茂の画(一)

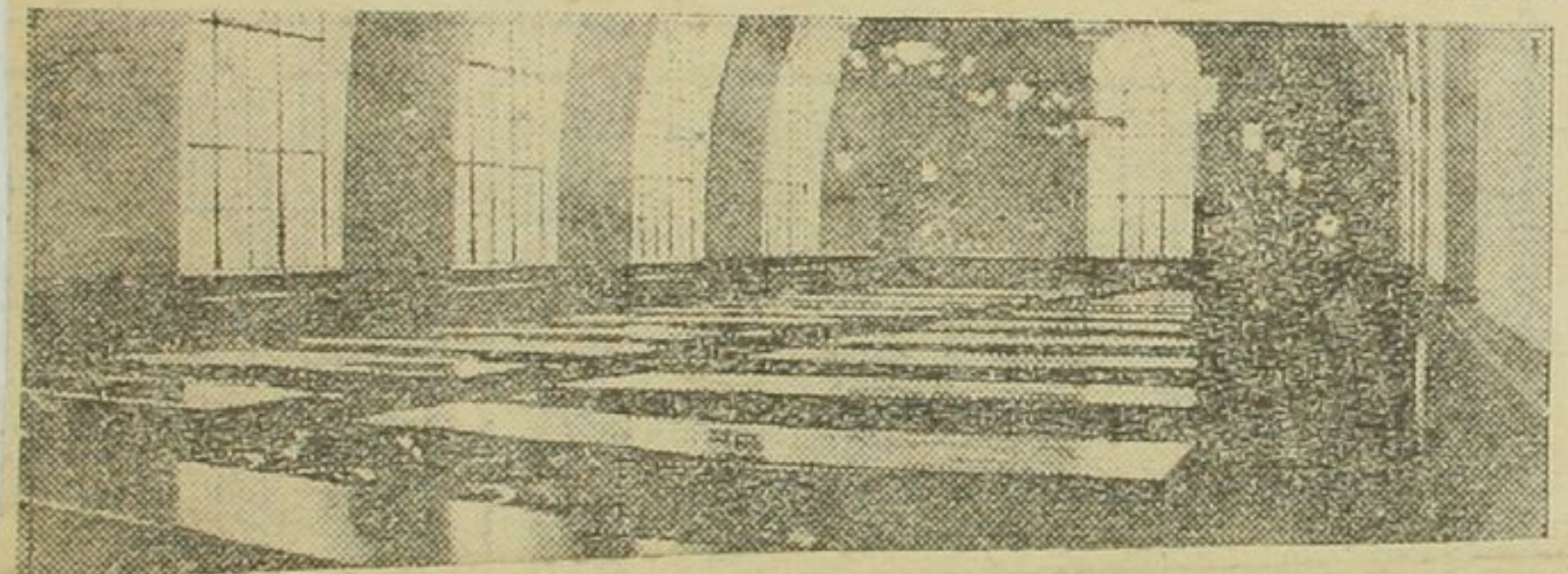
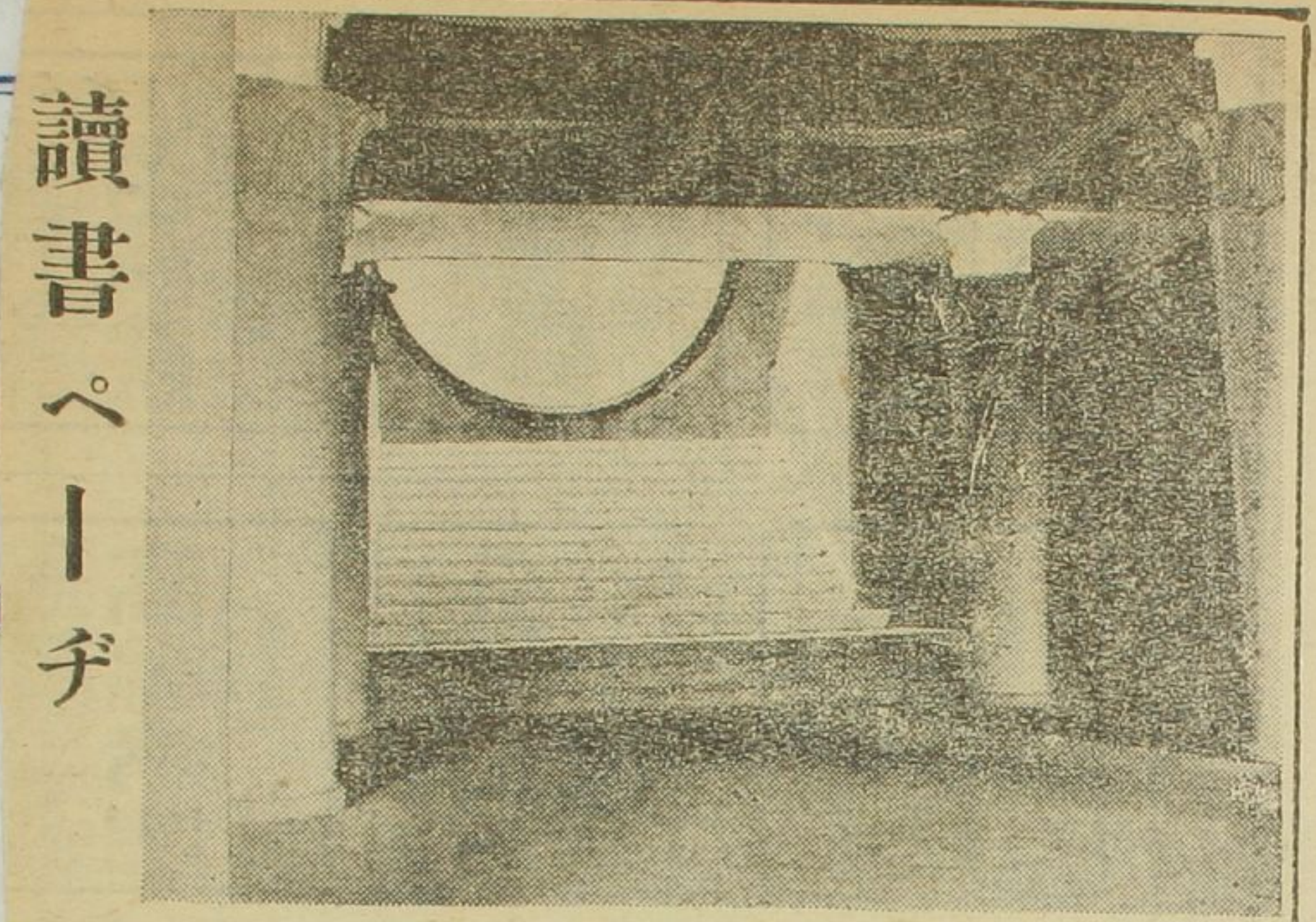
十月廿三日の録

○家為憂立の為余の振き... 此期到着するべき即刻旅... 丹其の意... 満ち... 忍ら画梅ニる然也





讀書ペー子



新築成つた早大図書館、トは入口、下は開覽室

○家為愛立の為余の振と  
 此親戚丹其原平一此現  
 蹟、ゆゑ之を其の旧得美術  
 業由し之をんく説ゆす、  
 之の十點をとりて其の成  
 反人少く来り一時施也

上へ運氣(湯)仕掛とさうする、之  
 の十六で劇(学)をさくして迷と解  
 とあり、皆滑  
 ハガ方次の画

**吉松小兒病院**  
 院長醫學博士 岡元俊  
 日本橋區濱町一丁目一番地  
 電話浪花四〇六番  
 入院 隨時

**吉川病院**  
 院長吉川春次郎  
 日本橋北島町二の五電浪元五〇  
 京橋診療所(銀座南一丁目二番)  
 電話浪花五八七番

**武蔵野病院**  
 内科・外科・小兒科・皮膚科  
 泌尿科・耳鼻科・齒科  
 院長醫學博士 河西健次  
 芝區新宿三丁目  
 電話四谷一七八番  
 産婦人科新設

**X光線内科**  
 醫學博士 宮原立太郎  
 肺助膜、心臓腫  
 芝區芝三丁目  
 電話高輪五八二六番  
 入院 隨時

**丸丘眼科**  
 眼整形・視力檢定  
 斜視・トラホーム  
 醫學博士 内田孝藏  
 東京朝野牛六二六〇  
 九時一五時 日曜午前中

**泌尿器科**  
 院長醫學博士 阿久津三郎  
**阿久津病院**  
 神田區淡路町二の四  
 電話大手五五二三番

**氏原医院**  
 内科 糖尿病  
 醫學博士 氏原均一  
 日本橋區室町一の二  
 電話大手一八七八番  
 自宅電小石川三二番

**瀨川小兒病院**  
 院長醫學博士 瀨川昌世  
 副院長醫學博士 大瀨喜作  
 神田區河合本茶の水  
 電話大手六六七番  
 X光線科特設

**内科 腎臟糖尿病**  
 醫學博士 百瀬五郎  
 (自宅) 大久保百人町二七九  
 診後六一九 電四谷二七七

**樂山堂病院**  
 外科・泌尿科・整形  
 外科 X光線科 齒科  
 芝區小島町七十三番地  
 電話淺草 六二〇〇番  
 六五六一番

**松山病院**  
 芝區三田二丁目  
 内科(醫學博士 松山陽太郎)  
 泌尿科(醫學博士 松山陽太郎)  
 外科(醫學博士 松山陽太郎)  
 産婦人科(醫學博士 松山陽太郎)  
 電話高輪五八二六番

**山村病院**  
 外科 皮膚科 泌尿科  
 X光線科  
 日本橋區(新大橋)  
 院長醫學博士 山村正夫  
 醫學博士 中村邦夫  
 電話浪花三三三〇番

**婦人科 濱田病院**  
 神田區河合(電話大手五五二)  
 院長醫學博士 小畑雅清  
 副院長醫學博士 林海三郎  
 副院長醫學博士 山田康三

**佐藤耳鼻喉科**  
 醫學博士 佐藤信郎  
 日本橋區藥研町角(本館)  
 電話浪花一七〇九番  
 千葉縣船橋町九日市(分館)  
 電話船橋一七七番

即満ちて、此為めは丹其の書中のその数紙流し  
 内こましく余の花弁とて其の味あるもの既二空  
 なるもの多きくハ中山書も交せかくなるもの多  
 日在るもの割合に價不廉也残る古画記  
 但此余の花弁中一頁茎、類未にも多く其れ  
 多端内に存するをえんが、余は丹其をばせり  
 意結に到りて白畫紙を奉け大紙をばせし  
 情の念を去んと擬も也、今亦丹其を物  
 余の家へ印して賣るを止すと思ひて愛惜し  
 書畫と骨葉を出一十四紙割賣す、こ  
 既後、潤像あるもの幾くハ余の苦心の存する  
 他人の心とるすを難せざるよ、世丹其の書

んし余の所しる價極、其の異紙をくえり、  
 余初の快心を記す

十月廿九日記

今日丹其と割賣の書左の如し

- 一 眞茶葉の小品書式 一五〇
- 一 若四方柱山笠書、其の教葉紙画
- 一 木末補文証香合 五〇
- 一 額合帳 花紙茶葉書合 五〇
- 一 額川茶梅茶歌 一五〇
- 一 額 加山山陽、其の 一五〇
- 一 良寛の幅 一〇〇
- 一 雲室照應の圖 五〇
- 一 象山石川流の画符 八〇

- 一 春琴先生書 一〇〇
- 一 但徠漢文書牘 一〇〇
- 一 菱湖書簡并履歷書二卷 七五
- 一 古香秋月房柳陰花蓋圖 七〇
- 一 鵬齋待簡 四〇
- 一 副島程庄懷紙分抄 五〇

以上

一千七百七十四

時更上金飾を二具も感へるハ平山をもし亦せんは  
 新字紙上余の書とて就て不感を感へるハ亦あり  
 其大意は滋味のよのよと安あめと唐書とあり  
 市島氏の書と立を漢字ありちかかす、故の味は少  
 くの價を拂はむと満足し得べきに似たりと冷評

と思ひんてあるはあつせんも、定ハるべきを得ざるの深  
 と滑ふへし、滋味の價の高下は物とさるゝものあり、價  
 の低きもの書は滋味あり、限るせん、故味の夜  
 するもの多く、富貴の眼に入らず、所謂大名物と云  
 如き入價の高の割合に、滋味あるもの多し、此  
 評冷評と似て、美の一面の真理と云ふもの余に心  
 興す

十月廿七日

○十月廿五日 此日五峯遺稿排印書本成り投入  
 のより三十部先づ利達、此遺稿出版書に余の  
 芳しきこと一とあるは、其の成を告ぐるを  
 己の愉快を拂ひ得ず、但此不満と感するもの二三  
 ある中、一就て、たも不満なるハ、是れ裁の拙なる



微と畏其集者自から因縁ありかもし  
感念の致し、筆を滞りし、その内、西脇  
其徳一、隻、腹、あ、切、小、皆、こ、何、う、後、其、氣  
治、各、て、一、二、付、大、道、大、地、の、い、ま、り、を  
夫、く、感、戴、し、ま、す、於、次、於、一、作、松、樹、の  
中、に、大、角、逐、一、に、逃、け、逃、れ、ん、は、這、へ、る  
自、分、の、如、く、勢、を、用、ひ、つ、と、や、氣、に、な、る、ん  
雅、甚、の、如、く、根、集、ま、ん、に、不、残、の、ね、手、に、感  
激、し、ま、す、而、し、て、其、揚、ま、す、や、一、也、花、拂  
ふ、も、此、振、舞、を、知、る、る、可、も、な、先、生、の、為  
め、一、笑、を、受、ま、す、と、や、吾、や、人、句、

廿四日

余の書立を自から、活し、道、義、名、と、い、ふ、い、と、り、余、の  
一、家、言、の、あ、り、ま、す、と、一、証、と、し、て、一、紙、の、出、簡、を、こ、し、て  
掲、げ、お、こ、う、

十月林号録

大都の真、中、で、書、畫、の、骨、董、の、最、大、の、書、立、  
場、一、此、の、本、を、活、版、や、印、書、の、最、大、の、書、立、  
場、を、受、り、ま、す、と、其、場、を、い、ひ、四、日、の、り、ま、す、日、經  
か、ら、ま、す、時、間、一、日、の、あ、か、ら、ま、す、易、用、を、こ、ま、す、  
所、に、窮、揚、大、余、の、如、き、物、が、自、家、の、名、を、こ  
つ、前、に、大、書、し、て、書、立、を、受、り、ま、す、と、い、ふ、中、大、  
膽、を、不、其、業、ひ、あ、る、佛、(、名、を、求、ま、る、者、の、自、家  
の、一、快、と、い、ふ、べ、き、ひ、あ、る、名、を、求、ま、る、者、の、自、家  
廣、告、を、目、的、と、す、と、欲、せ、は、こ、ん、ら、い、の、宣、傳、の、



冠冕と推すべきものがある。九物の某  
 者も家も出たもの、主流の相  
 納りであり、今類の棚は類公匹割  
 さんてみる、惜しいこと、十冊は多  
 雨濕の痕があるけん、欠本と無の自  
 今も也  
 未大部のふれと買ひぬこと、  
 家が狭く置く家が無い為、破格  
 此の大部のふれを購ふのは、此書が稀  
 観あるからである。十月廿二日  
 ○敦煌より我寶島版より古きを改  
 改をい出し、  
 とい前も記し、我が今朝の新書、  
 改をい出し、  
 か収め、あつた、こゝに、  
 改をい出し、

# 世界最古の活字版

敦煌石室から発見したる

る千の...  
 りてその實を明らかにすべき事は  
 心ひそかに識者の期待してゐたと  
 ころであつた  
 ところが、最近、推古會同人な  
 る松田福一郎氏は、敦煌の石室か  
 ら出でたる隋代大業三年の木活字  
 版を將來して  
 からず人々を驚かして  
 る。元來敦煌の石室  
 は、十數年前偶然の発見にかゝり  
 も版圖を見るの感がある。また、  
 字は佛名以外は同一であるから一  
 々書寫する煩を避けて、木版活字  
 を作つたものであるらしい。その  
 字畫の工合で直ちに首肯せらるゝ  
 ばかりでなく、二葉を對比してみ  
 るも文字は全く同一の形であるこ  
 とを發見するのである。一行に三  
 字版原主は五字版を繋り合せて押  
 う。さてこの圖に印刷され  
 三年の四字こそ、これを

## 五年のせまき法



肺氣腫 肺結核 肺  
 キカンシ 狭窄 キカンシ 擴張

恐るべ  
 起  
 以前にさかのほるを得ずとまで  
 推せられたる印刷史上の遺物が  
 更にさかのほつて隋代に出で、  
 からである。單に古き時代に書  
 かれ、又ながれたる文字及繪圖  
 は取て珍しとしな。例へば西  
 晋時代のとおほしき「三國志」  
 戦國策等があり、スタインやペ  
 リオの將來品中にも頗る多きをみ  
 る。けれども唐以前のもので、幾何  
 程あらう。この大業三年の刊版た  
 るや明らかその時代は隋代で  
 ありそれは正にわが推古帝の十五  
 年恰も聖德太子が法隆寺を建立せ  
 る年に相當し、西曆六〇七年、法  
 隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十  
 三年である。今日までに於る世界  
 最古の刊行遺物として

肺氣腫 肺結核 肺  
 キカンシ 狭窄 キカンシ 擴張

此の大部のものを購ふのは、此書が稀  
 観あるからである 十月廿六日  
 ○敦煌より我寶島版より古きものを改むか出た  
 との前者も記し、此が今朝の新書にてハ其の細説  
 が収められたり、こゝに貼付して他の巻を併せ

# 世界最古の活字版

敦煌石室から発見したる  
 貴重なる隋代のポスター

## 千三百年以前のもの

人間が物を記録した事實は甚だ古くにもかゝらず、印刷するに至つた事實は、さして古きことではない。四千年の昔、すでに、エチオピア、バビロニア、アッシリア等の國人が、石に刻し、木に刻し、わん土にほり、又は獸皮や貝殻等を記録材に使用した事實は遺物として、今日われらの眼前に置かれてあるが活字版による印刷の事實は古き時代の遺物としてわれ等は殆どこれを知らないものである。ひと西洋のみではなく、東洋にあつても、印刷物の出現發達に縁故あるものとしては、金石文と印章、そして稀に少數の繪畫をその間に發見するのみで、嚴密な意味での印刷上の遺物としては中世以前にこれを見ないのが從來の歴史であつた。かゝる状態にある時、今日まで世における版行最古の遺物として推察せられてゐるものは何あらう、わが法隆寺の白雲塔陀羅尼の佛像版であつた。これは神護景雲四年(實德元年)の製作にかゝり、唐の玄宗大曆五年(西曆にすれば紀元七百七十年、即ち今を去る千百五十五年といふので文化史上における日本のために氣を吐くところのものである。

**有** たないものである。ひと西洋のみではなく、東洋にあつても、印刷物の出現發達に縁故あるものとしては、金石文と印章、そして稀に少數の繪畫をその間に發見するのみで、嚴密な意味での印刷上の遺物としては中世以前にこれを見ないのが從來の歴史であつた。かゝる状態にある時、今日まで世における版行最古の遺物として推察せられてゐるものは何あらう、わが法隆寺の白雲塔陀羅尼の佛像版であつた。これは神護景雲四年(實德元年)の製作にかゝり、唐の玄宗大曆五年(西曆にすれば紀元七百七十年、即ち今を去る千百五十五年といふので文化史上における日本のために氣を吐くところのものである。

**然** しながら支那において、九十八年なる咸通九年(貞觀十年、西曆八六八)の版にして、今は大正博物館に收藏せらるゝ金剛般若經のあるあり、なかつく傳來後わが國の文明が、支那に負ふところ甚だ大であつたに徴しても、わが國の刊行が支那直系の思想であり、傳來であり、從つて支那を廣く探求搜索すれば、必ず中世においてこれ以前における刊行の跡を見出すか、遺物によりてその實を明らかにすべき事は心ひそかに讀者の期待してゐるところであつた。

**妙** からず人々を驚かしてゐる。元來敦煌の石室は、十數年前偶然の發見にかゝり

古代の經卷が山と積まれ五彩然たる佛畫が所狭きまで夥しく隠されてあつたが、恰もこゝを通り合はせたスタイン氏はその一部を大英博物館に持去り、翌一九〇八年更に佛のペリオ氏が繪畫の殘存と文書的主要のものをルーブル博物館に持ち歸つたのであつたが、事北京の官憲に聞えて殘存全部を北京に輸送すべく命じたが、大部分はその途次に雲散霧消して、僅少を京師圖書館に收藏してゐるに過ぎない。松田氏のこの版も、即ち昨年秋まで北京某大官の所蔵にかゝり、危ふく西貢に厄にあふところを脱れて、最近本邦に舶載せられたものである。松田氏の手に歸した畫は二葉であるがまた同様のもの。

**別** 一面あつて、大版の西貢某がこれを

この大業三年の年記ある紙本佛畫といふのは、佛といふもの、實は天部の形相にあり、何れも左右に二侍者を隨へての圖で簡素なる繪畫的手法による彩畫である。縦十二インチ半、横十インチ半、法隆寺陀羅尼と同質の厚手の黄麻紙より成り、不思議にも天平經に用ひたる正倉院現存の黄麻紙と殆ど同様の幅を有してゐる。畫の下地に紅文がある。その一つは「大業三年四月大莊嚴寺沙門智果敬寫敦煌守禦令孤押衛敬重僧佛勸衆生、供養受持」と八行に記し中央に佛名を記し南无大德佛とある。他の一葉もこれと同文で佛名功德佛とあるのを異なれりとするのみである。この文に

**依** ると、この畫は孤押衛なる名の筆に成りものと

二百葉あつた事が明らかである。畫は肉筆で一々形を異にしてゐるが、一度に多數を畫いたために恰も佛畫を見るの感がある。また文字は佛名以外は同一であるから一々書寫する煩を避けて、木版活字を作つたものであるらしい。その字畫の工合で直ちに首肯せらるゝばかりでなく、二葉を對比してみても文字は全く同一の形であることを發見するのである。一行に三字版乃至は五字版を纏り合せて押したものと推測出来る。最も感

るけれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

**古** 代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

**法** 隆寺陀羅尼より世界最古の榮冠を奪ひ去る權威あるものなのである。即ち、中世以前にさかのぼるを得ずとまで思惟せられたる印刷史上の遺物が更にさかのぼつて隋代に出でゐるからである。單に古き時代に書かれ、又ながれたる文字及繪畫は敢て珍しとしない。例へば西晉時代のとおほしき「三國志」(戰國策)等があり、スタインやペリオの將來品中にも頗る多きみ

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。

る。けれども唐以前のものが、幾何程あらう。この大業三年の刊版たるや明らかにその時代は隋代でありそれは正にわが推古帝の十五年(實德太子が法隆寺を建立せる年に相當し、西曆六〇七年、法隆寺陀羅尼の刊行に先立つ百六十三年である。今日までに於る世界最古の刊行遺物として

代文化史上の最重要なる一録である。同時に彩畫として紙絹に描きたる遺物として、又今日までにおける遺物として殊に描寫年代の明瞭に記録せられてゐる點からして、世の最古の貴重資料として賞讃深きものと認めねばならぬ。なほ右の圖が、古代におけるポスターの一種であり、今日のポスターの源流をなすものとして、注目すべき資料たることを認めてゐる人に東京高等工藝學校教授宮下孝雄氏があり、その他、同校教授伊東亮次氏並びに印刷局の水野工學博士等が印刷史上の重大資料として研究に資せんとしてゐるから、これら諸學者の科學的檢査の前に置かるゝ時、更に一層の價値を發見するに至るであらう。





配人を廢し漸やく先づ：掃きつゝある四五の使用  
人を退社せしむると共に新鋭の者を入り、寺の改  
革案を定ぬるに、特と云、福中も委員を奉  
け、余も此等の意見を陳し、一回の賛成を得  
し、寺を以て十二月總會を待ち重役二人を減す  
こと其他定款に誤りも変更を決せんと内定して  
るが、余の社長を罷あること、同意を得る能はず  
且つ、寺の時教を待つこと、寺の長、

校長の意見を海を渡り、夫しく不遇の地位にあるを  
早大の同窓を直々に寺の終焉後と振らん  
と、寺の長、寺の福後をも、提議あり  
社中、寺の長を欲せざる重役も、此の寺の

改選動を待つこと、寺の長、此の寺の長、  
を待つこと、寺の長、此の寺の長、  
せず、改革の大綱を、寺の長、  
を待つこと、寺の長、此の寺の長、  
の前、寺の長、此の寺の長、  
内定する、寺の長、此の寺の長、  
より、折角、寺の長、此の寺の長、  
縁因、寺の長、此の寺の長、  
目と定むる、寺の長、此の寺の長、  
余、寺の長、此の寺の長、

○ 齒 井川柳二句 (言耳) の當つて 東京朝日新聞

業時代に二葉亭四迷に無理に勤めて其の七説を  
相の紙と連揚したことがある。その「平凡」といふ説  
である。四迷に強いて書かせたものがあるからといふ  
から、其の草稿を花密保蔵した。その四迷の紀念  
物。このころに、散乱の遺稿はあつたから、縁起のある  
所に保蔵して貰うた。本望だといふから、自今より  
早大図書館に申すわけだ。申す人、早大が草稿  
此の名匠に縁起は多め、好ゆ。是の深い縁起  
をとりぬる。流石と書かぬ。今日人、托して  
昔稿を定めてきた。此の七説を六十二回に充  
つてあるが、全部揃つておぬ。いろいろの界紙に  
書かんである。中々、東家朝日の原稿紙に書いた

この七交つてある。四迷の著改をえる。為の左に一紙  
を収めおく

十月廿七日記

◎昨秋四藤合の例令を例の東台の梅の亭といふ。又  
野在平が清政の高者で、伎楽の研究を説  
し、酒田田中巴雷(智多)の作に、係るは曲を友  
おといふ。婦人が地といき。女優家信子が教書の舞  
踊を演し。○鳥を以てけし。酒後不復。飯一が其  
家。信の。幕府時代の。家のお船の。回春と。船  
吹一冊を示し。又梅川の。身世。物が。的。元。年。柳。橋  
後打を免かん。比。こと。と。誤。り。也。  
五治の家。の。七。と。靈。山。序。時。より。新。幕。府。の。お。船。方。を  
つとの。向。井。将。登。の。年。の。序。一。れ。目。附。が。あ。つ。た。祖







の株を買つて柳橋の二の宮の傍を過ぎるを根本に  
 寄せてこれを根本と呼んばと云ふ詭しをししに  
 此の世將のつらひの海法や芝居のハコシナ材料か  
 あるのいふを取ることをせしむ或る豆府の屋か  
 上の宮を寄買つて逃げ助けにことむらうを找  
 料するといふものゝ氣が知れぬと氣筋をいひ  
 かぬ何れも柳橋破産と新義の拍干の故を  
 もつてある割のいふあると皆に一笑し此の初  
 めて人のいふ支の室業の面接しに十月廿日記  
 の五峯遺稿に杜業題名如斯し五峯の縁に  
 深きも杜五毛を遺行とせし傳ふに頼漸徳の伝  
 へず或る五峯の山人を記して五峯自筆のを

十二行

# 五峯遺稿

七松山房梓

と為すまのあつとせき一円す、友人同士の出いれに  
似たりあつ、余の書或る五卷、似たりあつ、  
九松より及ひたり

○家蔵書との結果、平山書所報に據るに、賣印  
品價格の八千六百餘圓、残る正札價五千餘圓也、  
此のち、結果といふ、一幅の書畫二三萬、  
賣印の少く、此種の幅を、購ふ人稀し、  
占を為す、一快也、余の書、  
人、あ世斯の、人、あ、  
人、あ、  
之れに在らん、  
十二行

田子も、  
余が一旦出さんとして、  
外、  
手、  
二、  
印、  
利、



聖七法して大なる... 其の十数年者...  
骨董を金と購求せし多く余か不...  
に購ひ入るるもの多し... 元資を多く  
入るる也... 元資を入るる割合に人...  
を授けしものあり... 其も去る場...  
寧ろ其則也... 此... 彼果を得るを  
正則とせん... 余の... 結果も...  
ありし... 唯れ長く物を... 花... 買入...  
利子を... 花... 花... 花... 花...  
あり、元来... 花... 花... 花... 花...  
う... 花... 花... 花... 花...  
るんも、敢て利殖を念とせし... 余か... 格...  
十二行

利子を換するも... 其の... 利を...  
指すの... 又... 結果と... 謂...  
必... 却... 此... 今... 次... 痛... 切... 感...  
金のお... の... 甘... 貴... い... の... 事... こと... を... 念... 入... せ... ぬ...  
次... 又... 感... ず... る... 花... 苗... 買... 合... の... 面... 倒... する... こと... して... 種...  
その物... ある... 事... と... 繰... 返... する... こと... の... 思... 考... する... こと... あり... たり...  
以上... 抄... 録... 内... 家... 花... の... 回... 方... の... 金... を... 除... 外... して...  
此... の... 回... 方... 部... 類... 書... 書... 七... 敢... て... の... 一... 冊... を... 記...  
近年... 十... 餘... 年... の... 範... 圍... に入... る... 可... せん... 事... あり... たり...  
此... 書... 書... 抄... 録... 百... 種... を... 記... し... 購... ひ... 入... る... 事... あり... たり...  
如... き... 其... の... 一... 例... あり... たり... 此... 等... の... 回... 方... と... 他...  
日... 安... 命... を... 勤... する... 事... あり... たり... 也... 十月... 廿... 九... 日... 記



つて曾國藩の序に光緒庚辰の事  
 山代出版の事なることを知るべし  
 此書本編にて長篇といふを添へ本編  
 三十八冊長篇二十冊とす、長篇の  
 蓋し補遺と見ゆべしとの事、長篇  
 の二回を缺く、本編の回は何人の葉  
 数を知らず、極めて出せる事、也  
 此書の原刊本四本友人と見ふこと  
 近年支那より船載せるもの多  
 かりしが、書肆の言ふ所と據らん地  
 方版なるもの似たり、蓋し京上海に  
 リ来ることありしとす、往々長篇

を缺くものあり、定本とあるが、

一 志つけかこ

一冊

此書の誌とす、きり古活字版なるこ  
 とす、活字の式普通の体と曰ふか  
 ず、字体緻美の特長あり、家巻は  
 一休の体と活字(名忘んとう)一冊  
 あり、今出ると比較し得るものと活字  
 の式似たりと見え、元紙某書に  
 あり、稀んと此活字をもちて刷り  
 たりとのあるものあり、研究の資  
 料とすべし

安永七式の歳考行する平安殿義  
 子方刻する所の印七十餘を収む  
 卷首江村北海の序あり、宗徒垣龍  
 龍公美の叙あり、自序の中、寶  
 甲由寶圓未曉信使、東阿本四  
 一駐節の節、信使物、池原道雲  
 の一乃竟象と在、此人の印譜を  
 い求むと物言し、記す、道雲  
 と在、傳め、き、家刻家、い、  
 人、世、母、歎、い、  
 一傳、古、高、印、譜、あり、五、式、印、譜、と

以上の内耕後、  
 刻し、  
 外、  
 余、  
 思、  
 以上の内耕後、  
 刻し、  
 外、  
 余、  
 思、

以上の内耕後

十月卅一日記

以上の内耕後、  
 刻し、  
 外、  
 余、  
 思、  
 以上の内耕後、  
 刻し、  
 外、  
 余、  
 思、



所法匠の居るあり、其を尾に千幹の  
後考へ、初る美敷より、何れなり此  
坊可く出ること始る禱し、若あると  
一尋人よりあると見えぬ此より

○楠瀬日年かき同人と書富とよふ能徳を述べて  
見たりと云ふに余に程々のお供がある余を  
自失を深き格に扱つてある、書富と関係の多柄  
の取らざるべきのや、後ある受付けしことおやしく  
記すか出来るか、如何か、余の云ふこと妙念する事  
である、多くの因がある事といふけんども、文屋を  
を因とし、見れば所が、どん丈人を惹きつけらるる

らうか、おと角人の心と知や角のありて其眼を折  
るべきから、初病より書富の徳夜の扱らる  
を引受け、當る者多論をあらはし、こともある  
から、大凡そんを交新見とするのたが、それこそき  
洩し、いふが、いくらもある、かう氣あがり、ま  
左に一二進場する、ことを書富とつと

一書富とのあり、一程特別の構造法があ  
る、おと角のいかに多くの場を、書富の心  
を考へ、おと角のいかに、おと角の心は、  
指針より、七内部のれ、おと角の能く、おと角の  
按排、おと角の、おと角の、おと角の、おと角の、  
体と、おと角の、おと角の、おと角の、おと角の、

こといふても、ガウントの平凡の家を考へる  
二冊つて思ふも一向書寫の致さまいいひあ  
う、内容がなる大切である、別くは書寫の  
文を容れその因が大切である

世間の書とて書寫を要する後の家や  
著述家の所其境遇が不ぬ如書の致さ  
書寫といふものをあらわす如著者の  
室を問ひ合ひてみるは、さぬ之んて及  
し、亦生書寫を致し必要としまい  
人が却つて其流る書寫を考へてみるは、必  
竟家が商人か、建築し、造るものけ得る  
からである

一 書寫を要せぬ人の書寫は多くの場合家の  
裝飾とすべしである、飾るは意味がある、何  
から何を如何に飾るかと雅緻がある、奠茶  
家の席とて、此風の書寫と通に合つて  
ながある、多くの氣が利いてある、あかし裝飾  
の家であることいふべきである

一 書寫の本体は飾り物かまじ仕立場である  
から、自然の趣があるべきである、假令人の性  
質が、千ヤコト片ついてあると、乱舞の如  
いふもの雅さがあるかあるか、仕立場  
の面目があるべきである

一 書寫は人の業務を助ぐおのづから趣





ひある関係上自然に此等の物が多く生じ互に  
用書の何れを多く書き置居の如き趣があり  
趣がある  
16) 洋風の書名に重なる趣意の上での  
趣意がある  
和風と異なる趣意とあるへきを  
ある

一 書名に多量の人々の性癖を兼保するもの  
が多い例に、此書名遠慮するもの  
例に、  
新の七掛物、遠慮するもの  
趣意を要するもの、  
ハ素直な趣意を要するもの  
味七あるもの

潘谷見之而拜曰、眞李氏故物也、我生再見矣。』一世の文士潘谷にして此語がある、李墨の珍寔とに知るべきではないか。

◆支那墨が唐宋元明までは、その品質を維持して、日韓兩國の製墨家の模倣を容さざるところで、我邦が唐墨の名によつて之を愛用したのはその所以がある。然るに、近代に至り、支那墨は、その製法墮落して、後進の和墨に若かざること遠くなつた。何故にそのやうになつたかと云ふと全く、用紙の關係である。支那紙は、紙質が劣悪になり、極めて脆くて薄く、とても在來の墨の有する膠氣には堪へなくなり、書けば紙が縮み上つて了ふ。夫で墨の膠を弱くする必要が起つた。是が現今の支那墨の通弊たるものである。昔し支那墨が唐墨の名に於て、我邦の文人墨客輩に賞用されたのは、つまり清初以前の古法の墨であつた。然るに邦人は、この事を知らないうで支那の墨とさへ云へば、唐墨の名稱の下に、悉く優良品だと信ずるから、夫を使用した記録や書畫などに價值相當な成績が現はれるは已むを得ない。

すべて墨は、膠と油煙又は松烟、石脂漆煙などを以て製するのであるが、その膠は獸膠たるべきものである。然るに近代の支那墨は、魚膠を以て獸膠に代へたのだ。魚膠は膠として力が弱い。現代の支那墨が柔かたで藩がドベ／＼して、早摺れがするのと、墨の摺口に縦横無數のヒ／＼割れが生じ、甚しきは稜の方からポロ／＼にくちけるのがある極めて無風雅で殺風景である。硯と墨と印課とを文房の三鎮だと稱して重寶がる支那人が、ようこそ現代の惡墨で満足をして居ることだと、ひそかに支那人の性質を不思議がらずには居られない。

支那墨や朝鮮墨が、十中八九まで魚膠を使用して製出されるのに倣はず、獨り和墨が十中の八九まで獸膠（主として中膠）を使用するのは實に賞すべきことであるが、我國の書家や書家に於て、偶々支那墨の魚膠製たる所以を知つて居るものでも和墨の使用法を知らぬ爲めに、和墨は書きたは書に適しないと斷言をして居るものが多くある。是は以ての外のことである。故人橋本雅邦畫伯が、邦製の梅仙墨を使用して、使墨法を門弟に啓發せしめんとした所謂名工談なるものがあつて後段に記くのであるが、夫らに依つて見るも、良質の和墨も、その眞味眞價を知るの伯樂が無い爲めに、徒らに世に捨てられてゐる慘めさがある。野に埋もれるものは、遺賢や驥北の名馬ばかりでは無い。

◆世間では學校や諸官署の掛札の文字が淡くなつて居るのは、支那墨で書いたのが多い。和墨で書いたのは、縦に文字は淡くなつてゐても、文字のところだけが凸起をして居る。是は獸膠たるの餘徳である。最良の和墨で書いたのは、風雨に何年曝されて居ても、墨色に滲りが無い。筆者の郷里に、内村友輔と云ふ明治初年の儒者があつて、近ごろその人の遺品の墨を以て書かれた板看板の字が、まづかつた爲め、その文字を大工に削らしたところ、墨の膠着の度が緊しくして、鉋の刃がコボれた。斯やうな墨は萬代もの、寶墨であるが、墨は斯くあるべきものとして製出する熱心家が、果して當代にあらう歟。

和墨は要するに支那墨よりも優ぐれて居ると言つても、和墨が悉く良いと云ふのではない、驅出しの製墨家に賣出され

る下等墨には言語道斷なのがあることは無論である。上方の製墨家には支那へ渡つて支那墨の製法を研究し、和支折衷式の墨を製り出して居るものもあるが、その墨は、和紙にも適し支那紙にも適すと云ふので、一派の人には認められて居るけれど、後世に残すべき文字なり繪畫なりは、矢つ張り純粹の和墨の良品に超えたことは無い。近ごろ歐米の製墨家が、和墨を愛用するに至つたのは、和墨の實價が認められたわけである。

と言つて、和墨でも、二百餘年前の支那墨即ち獸膠製の唐墨でありさへすれば、墨齡を問はず皆使用するに堪ゆるかと云ふと、左様でない、老齡の墨は皆駄目である。

◇すべて墨は、五六年から三十年前後を使用の良期とし、最も可なるのが十年齡乃至二十年齡あたりである。特別な良墨ならば五六十年まで使用に堪へる。老齡の墨は、概して膠氣が枯渇して墨色も劣り、淡褐色又は灰色を發して來るか、或は、化石のやうに固くなつて、摺ることが不可能なのがある。後者は奈良墨に多い。

世の墨道樂家が、古墨を無闇に愛賞して千金の如くに大切に居るのがあるが、是は古墨は永久に墨の實用を失はぬとの誤信を抱いて居るのであつて、氣の毒な譯である。關西某地の素封家で、古墨を四百餘枚有つてゐる人があるので、一日その人を訪ねて一覽を惠んで貰つたところ、白微だらけの老朽墨ばかりが雜然として河の匣に累り合つてゐた。所有主は是で大變な誇りを見せてゐたが、實用に立つのは唯一の蠟も無かつた。茶器なら何程古くてもマア役には立つが、墨

## 鑑墨の

## 話(中)

岡田蒼溟

紀州田邊の特志家その人は彼の鈴木梅仙である。此人は若いときに大藏省の出仕であつたが、文晁の書く墨繪の墨色淋漓たるるところから、その用墨が和墨であることに氣つき、同時に、世人が支那墨でさへあれば、唐墨と稱して之を珍重するの愚を憫み、且つ支那墨を用ゐた書畫の生命の短いことに想到し遂に眞の唐墨の古製を發明して、書畫を保護するは、東洋美術の爲めであると思つたのである。

そこで官を辭して、製墨家となつたが、いろ／＼と試みて見るも、古代の墨のやうな良品が出來ない。何年かの星霜を費して、漸く得たのが、藤代墨であつた。

藤代墨は、奈良朝時代に我邦で出來た墨で、當時朝鮮を経て輸入された北支那地方の墨に匹敵をした品であつたが、後世に紀州墨の代稱になつたところ、いつしか衰滅に歸したのを梅仙が其名を興したのであるが、梅仙のは品質が稍や之に類して居たと云ふほゞで、まだ十分良質の古代藤代墨には及ばないと云ふ自覺があつた。奈良朝前後の製墨業は、半官半民業であつて、朝廷や公卿やの使ふ墨は特に、良工の受持ちになつてゐたから、頗る良品であつた。梅仙は古製に追及しようとして、根本方針として、煙の選擇に心を砕いた。墨は

ばかりは老朽品は全く用を爲さぬ。墨は硯と違つて其價値は徹頭徹尾實用にあるのだ。人によつては古墨を骨董品にして論ずるが、夫は官公の使つた瓦硯を、硯としての名品と考へると同じ筆法のもので、單に由緒を賞美するだけのものでは古墨の實用的價値を過信した人よりも無理解だと言はねばならぬ。

書にしても墨繪の畫にしても、墨色淋漓と云ふことは、一個の必要な秘訣であるが、是は手腕にも據ることだけれど、一つは用墨にも據つて現はれることである、我邦の書家が、近年は、開明墨などの墨汁を使用する傾向が多いが、是は書くものも書かすものも思はざるの甚しきものである。

開明墨汁は、黒いことは一見素人目に著しいのであるから、夫で書いたのは墨色が美しいものと觀られてゐる。けれども墨の有する自然の美澤が無ければかりでなく、軸物と爲すとき表具師の手にかけると、裏から打つ水刷毛のときに、その水氣が紙に徹して、表面の文字に摺れない汚斑を能く生ぜしめる。支那墨も亦同様な缺點がある。

書なり繪なり、一度描いたら消えない墨を發明しようと思つた素人の製墨家か、明治の初年に紀伊の田邊に生れた尤も支那墨の如き良き墨を製しようと思つたものか昔しから我邦にあつた。桃山時代に創業をした。奈良の今の古梅園の先祖などは良墨を製出したもので、上流の愛用を被つたものだが、明墨の上乗なものに比するときは、大分の階差があるやうであつた、元祿時代に清墨が不良品となるに至つて奈良に製墨家が輩出したのも需給の自然關係であつた。

煙と膠と、杵搗(練り)との三要件を必須とするが中に、煙が第一の基礎になるのだ。

煙と云ふのは油煙でなく、煙素と稱ふるのが適當である。松樹を焚いて採取したのが松煙、石油又は石炭から採つたのが石脂又は炭煙で、油煙と云ふのは、胡麻や、菜種やの脂肪に富んだ植物を焚いて採つたのを云ふが、何れも採煙の仕方によつて、品質の優劣が出来る。疎末な採煙法によつて護られた油煙は、松煙にも劣り、松煙でも、松の種類を擇び、また精緻な設備にて採つた場合には、墨味が強く、煙の分子も細密である。

梅仙は、墨色の最上のものとして、古來から定評のある紫光ある墨を製しようと思つて、煙素の最良品の發見に腐心をし、植物と云はず、動物の種々なる脂肪をも焚いて採煙をし、而して製墨にかゝつて見たが、約十年餘りの間に一萬圓の家産を之に投じ盡した。明治十四五年頃の一萬圓は現今の二十萬にも匹敵するものであるが、遂に彼れは、煙として理想的のものを發見した。

夫は或る蔓草である。夏から秋にかけて、暖地の山地には

少からず繁茂する大きな蔓草である（筆者は之を梅仙から聞知して居るけれど徳義上公表を憚る）。彼れは、そのころ東京に墨店を開いて居り、自邸にても製墨をして居たが、或る日巖谷一六居士の宅へ駆けつけ、玄關先きから、出来た／＼と大呼して居士の書齋へ飛込んで来た。

居士は何事かと思つて會ふと、先生遂に出来ましたとて一挺の墨を與へ試墨／＼と連呼したのが「牛舌」と云ふ墨であつた。此墨は梅仙がかねて理想としてゐた唐墨の古製に類した墨であるから、喜悅に堪へなかつたのである。その後大成した梅仙墨から評せば、此牛舌は今では一挺型（四夕）五圓内外のもので彼れの第三流の墨に過ぎないけれど、當時は有頂天になるだけの成功であつた。

梅仙は一六居士の激賞を沾ひ得て、更に一段の熱心を加へその後も晝夜研鑽精勵し、明治四十二三年の頃に、彼れの全理想に遜かい良墨を製出し得るに至つたのである。（併し世評は馨ばしからなかつた、と云ふのは、資本關係で、一定期間保藏してカラカシてから賣り出すことが不可能で、カラさな内々に賣り出したのと、素人受けのする膠光が乏しかつた事による）所謂紫光あるものが夫である。墨は紫光を上と爲し赤光、黒光、青光、白光の順位を以てその墨色の氣品を立て得るのだ。墨光の説は支那製墨家の古傳である。晁氏墨經に

黃五枚亦以眞朱一兩麝香一兩一皆別治細蕪都合調下鐵白中寧剛不宜澤、搗三萬杵、多益善。合墨不得三月九月、

この明治の名墨家は、大正六年に八十餘歳にて永眠し、子孫

不佳」と、紫色なるものは、實に機微である。

○ 墨光を試むるの法は、種々あるが、中古より支那人の採用するものは、黒色の漆板に、墨を引き、之を水中に入れて日光に面して之を透かし見るのだ。煙の優劣を甄別するには、顯微鏡を以て照査するに若くは無い。

梅仙は「古墨法」の謂へる煙細膠新、杵熟蒸匂、色不染手光可射人の四語に據て前み、「香壁」「扶桑墨」等よりして「神通精煙」「極品清煙」「一品芝麻精煙」「神龍」等の絶品を産出し得、雅邦、玉章、鳴鶴等より、支那の李廷珪、程君房、羅少華等の製品に伍するの讚辭を呈せられた。梅仙一日その新製の良墨一丸を携へて村田丹陵を訪ひ、夫を以て葡萄の墨繪を畫かしめたが、墨色蒼潤を極め、葡萄の房は自から紫光を帯びて見えただ、兩人相顧みて語なく、唯だ莞爾として各その技を得たるを怡んだ。梅仙墨の名を發たるは蓋し偶然ではない。

梅仙既に煙に成功してから、膠にも亦成功をした。膠は最上の牛膠を再三再四精練を累ねて之を用ゐた。奈良京都の製墨家にも精膠家はあるけれど、梅仙の精練した膠には及ばぬ精膠も亦杵搗の精緻を必侶とするは無論である。「相墨經」に曰ふ、凡墨日々用之、一歳終、半寸者、萬金不換と斯る

不浮湛々如小兒目睛乃爲佳也」と良墨の實質の説明は略

氏と誤り、こゝに正誤す。

濕時敗臭、寒則難乾、溼溶見風日破碎、重不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>三兩<sub>一</sub>云々、擣くこと三萬杵は、白髮三千丈式の支那人の誇張癖であらうが、梅仙だけは、その良墨には三萬杵を實行したらしく。

○ 墨の煙素が精緻で、膠が良く練が十分であるなら、三拍子揃つたと云ふべきものである。蕭子良が仲將の墨を賞めて『一點如漆』と評したことがあるが、古の良墨にて書いた文字が、今日に之を見るに、新らしく漆で書いたかの如くに、清明濃黒のものがある、筆者は曾て、平經盛が嚴島神社へ奉納をした一巻の寫經を見たとき、その墨が漆を點じた如く一字々々紙面に盛り上つて膠着した言はん方なき美しさに驚かされたことがあつた。

古の良墨は斯くの如くであるから、心なき人は、墨でなくして漆書だと云ひ、また漆を混じた墨だとも云ふ者がある。何れも誤りである。尤も支那でも五七百年前には、膠の代りに漆で練り固めて製した墨があるとの説を爲した人もあつたが、漆を以て膠に代へたら、その墨は到底硯にて磨ることは出来ないものだ。漆の如き墨は古の良墨である。晋の衛夫人(書家)の言に「墨十年以上、強如石者、蓋煤久而黒、黒而紫膠久而固、固而乃發光彩」此古墨所以重於世」とまた蘇東坡は「世人論墨、多貴其黒而不取其光、光而不黒固爲棄物、若黒而不光、索然無神采、亦復無用、要使其光清而

である。眞の良墨は決して泡沫は立つものではない。泡沫は膠氣の堅きに過ぎた爲めで、決して磨り方の拙劣なにはよらぬものである。また泡沫は何等の妨げにならぬと云ふ者もあるが、是も大なるタワケ言葉である。泡沫が筆鋒に附着するときは、之に妨げられて細字細畫は得難い、また墨色も發揮しない。梅仙には泡沫は絶対に無いから、非常に細字細畫が描ける。

某書伯が曾て巧みに馬尾の繊細なものを書いて文展に入選された折りに、自ら辯じて曰く、我が繪は腕や筆にあらずして梅仙墨のお蔭であつた。他の墨を用ゐては、長き馬尾を畫くに中途に墨が切れて筆を繼がねばならぬが、梅仙墨を用ゐるときは、墨液精微にして縷々として筆端より絶えず、容易に一筆に馬尾を描くを得たり云々。

また梅仙墨は一時、世の丹青家より排斥をされたことがあつた、彼等は一齊に言ふ、梅仙墨は雲烟その他隈取りなどを爲さんとするとき、墨氣狂漲して餘濫たがる癖ありて厭ふべくと。然るに橋本雅邦は當年の美術學校にて生徒に梅仙墨を奨め、生徒より不滿の言を酬いられた。そのとき雅邦は、諸君は世の畫家と共に梅仙墨の性質を知らないから駄目だ、諸子は予の畫を見るべし、予は梅仙墨のみを使用して少しも意に適せざるところが無いではないか、諸子は、水を引くに當りて不心得の點あり、墨決して不良ならず、罪は諸子にあり努力せよ、名墨は名手の侶たるに適すとて、自ら悟入なきしむべく誨へたと云ふ。

この明治の名墨家は、大正六年に八十餘歳にて永眠し、子孫

の言を以て盡くされてあらう。

筆者先年、京都及奈良の各製墨家の良墨と梅仙の良墨とを取り、同程度の濃度に磨り、同一の紙に同様の字を書して天日に乾かすこと兩三日の後、指を背めてその文字を一擦したところ、開明墨汁にて書いた文字の如く、字は一樣に皆きたなき抹斑を生じた。茲に於て梅仙墨の能を疑つた。その後半歳ばかりを経て、再びその紙の文字に對して、濡指の一擦を試みたる所、梅仙墨にて書きたるものは抹斑を生ぜず、他は少しく生じた。半歳にして此差がある。十年五十年、百年の後、文字紙面に膠着せばその優劣知るべきのみとして釋然たるものがあつた。(梅仙の良墨は、その滑口の角に於て、指甲を削るべきは亦物を以てするが如くである)

○ すべて墨を買ふものは、形小にして價高きを良品とする原則と知るべきも、尙ほ外觀を以て品騰してはならぬ。必らず試磨するか又は價を以て較するの外は無いが、香氣の如きは甚だ人を欺くに適して居る。惡墨も麝香龍腦の類を混ぜば、素人をチャームするに足る。墨の自然の香氣は、精膠と煙との固有の匂ひにある、たゞ麝香等を故らに和するは、宿癖の腐臭を妨げ、或は紙魚の害を防ぐの用に供する爲である。尤も、書齋を薰ずるの法としても一策たるものである。

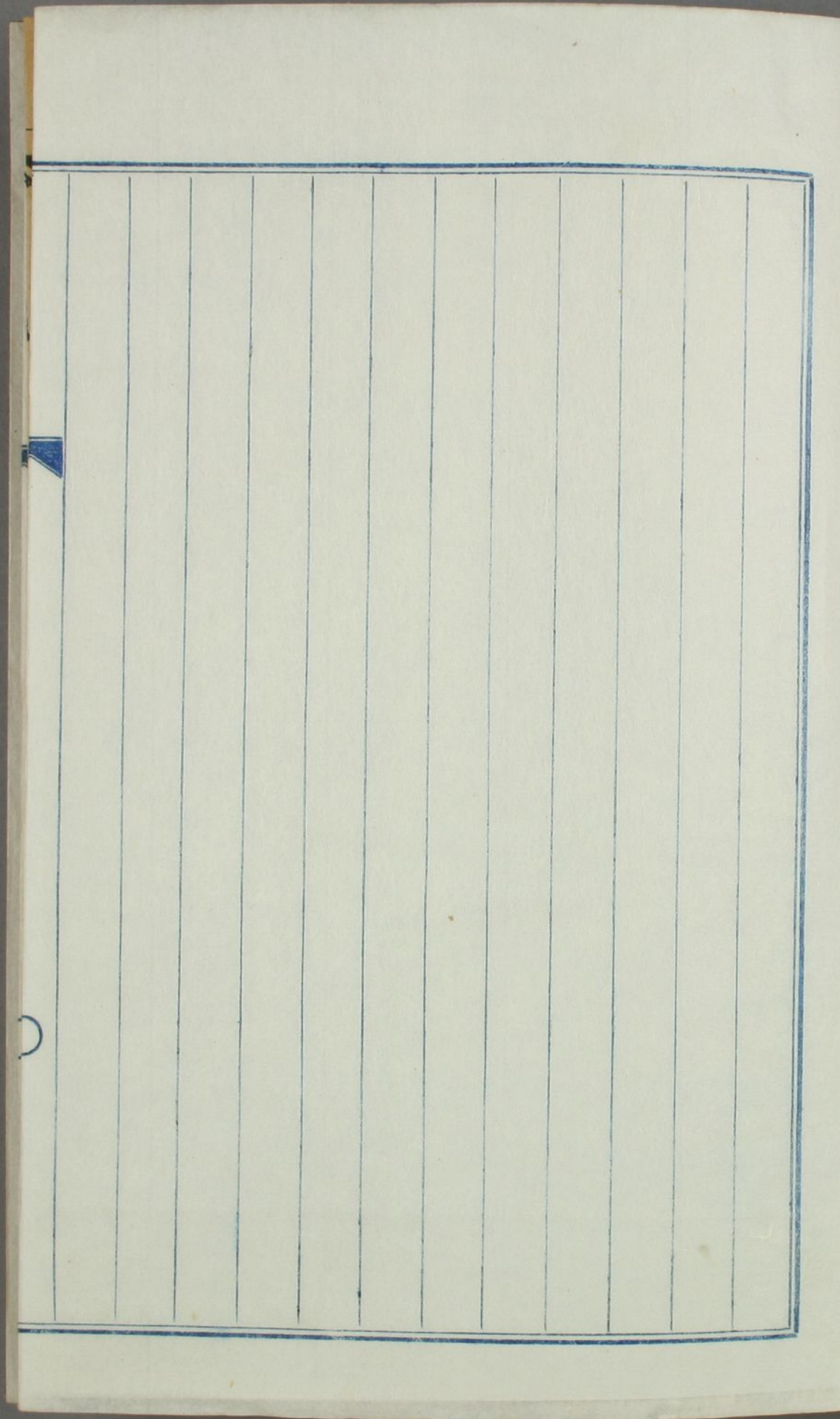
○ 墨色の美なる墨にして、普通に良墨と稱せられながら、之を磨るとき微細な泡沫の立つのがあるが、一度立つた泡沫は容易に消去しない。之をその製家に訊ねると、磨りやうが悪き爲めなりと答ふるが例である。是れ顧客を愚にした返答

(第三流と言へども尙ほ優に他家の一流墨に拮抗する)

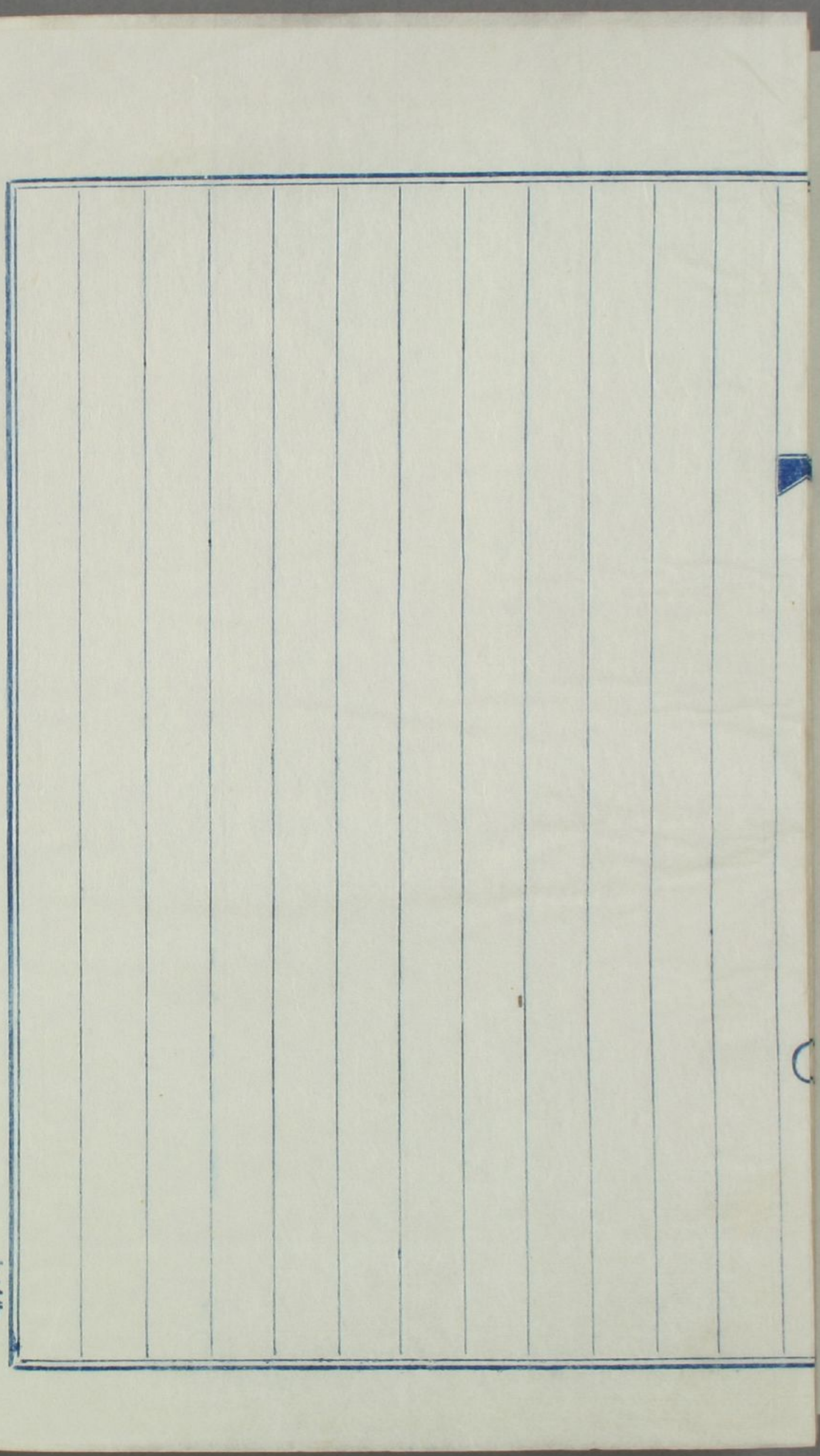
○ 近世奈良に紅花墨なるものが創製された。是は彼の謂ゆる紫光なるものを擬裝する爲めに、故意に人爲的に緋を加ふるのであるが、丁度是は徳川中葉に藍を混じた墨を製出して、青光に擬せしむるに至つたのと同じゴマ化し製法である。兼葭堂は之を愛用した。支那でも曾て此種の人爲的技工を加へた墨が珍重された時代があつた。

○ 「五雜俎」に記するところに曰く、宋の徽宗、蘇合油を以て煙を搜して墨と爲し、雜ふるに百寶を以てす、金の章宗之を購ふ、每兩(四匁)黄金一斤に直す。夫れ墨は苟も用に適せば金珠を藉りて何をか爲さん、淫巧多靡此れを甚しと爲すべし、今方、程二家の墨、上なる者は亦白金一斤を須て墨三斤に易ふ、聞くに亦珍珠麝香ありと云ふ、余が同郷方承郁、歙州の令となり、自ら青麟髓を造る、價亦之に倍す、近日潘氏に開天容墨あり、又之に倍す、蓋し又黄金を用ひたり(中略)近來方程が墨甚だ小なるに苦む、大さ僅に指の如し、之を用ゆれば盡き易し、而して青麟髓、開天容最も小なり云々。

「現代新聞雜誌批判號」掲載「岐阜新聞社」の寫眞説明中、社長清寛氏が森寛氏と誤り、こゝに正誤す。



十二行



# 朝知新聞

東京	電話 六六六
大阪	電話 八八八
名古屋	電話 四四四
京都	電話 二二二
神戶	電話 三三三
仙台	電話 五五五
札幌	電話 七七七
旭川	電話 九九九
釧路	電話 〇〇〇
帯広	電話 一一一
青森	電話 二二二
岩手	電話 三三三
秋田	電話 四四四
山形	電話 五五五
宮城	電話 六六六
福島	電話 七七七
茨城	電話 八八八
栃木	電話 九九九
群馬	電話 〇〇〇
埼玉	電話 一一一
千葉	電話 二二二
東京	電話 三三三
大阪	電話 四四四
名古屋	電話 五五五
京都	電話 六六六
神戶	電話 七七七
仙台	電話 八八八
札幌	電話 九九九
旭川	電話 〇〇〇
釧路	電話 一一一
帯広	電話 二二二
青森	電話 三三三
岩手	電話 四四四
秋田	電話 五五五
山形	電話 六六六
宮城	電話 七七七
福島	電話 八八八
茨城	電話 九九九
栃木	電話 〇〇〇
群馬	電話 一一一
埼玉	電話 二二二
千葉	電話 三三三

**成人**  
十月号出づ  
毎月一冊 発行定額二十元  
東京 東区三番町六三 開発社  
振替 東京 四〇三二

# 婦人

金澤博士苦心の結晶  
歴史は古く内容は新し

(送料書留廿七銭)  
三省堂式新形・高級クロース製  
縦六寸七分・横三寸六分  
頁数千八百十餘頁

新説  
狂言  
の月極  
大悪党

に於ては、先づこの二主義につ  
きその是非得失を考慮せざるべか  
らず、二種の主義とは、一は法にお  
いて一定の型を作り労働者の團體  
をこの一定の型の中はめこまんと  
するものにして、他の一は労働者  
の現在の法律的実態の状況に  
かんがみ、現状を現狀としてそのま  
ま規律し、單にいはゆる團結ある  
ものを公認することを以て立法の  
要旨とすべしとするの意見あり

**第一の 主義即ち一定の**  
型を作らんとする意見は労働組合  
法を制定するに当り、あるひはこ  
れを産業別若しくは職業別のもの  
に限らんとし、あるひは地域的限  
に政府の認可を要するものとな  
り、しかしてこの意見は現在我が  
國の労働組合の法律上の地位、實際  
上の状況、及び政治上の大小より  
考慮し適當ならずと考ふるものあ  
り、けだし先づ第一に労働組合の  
我現行法上の地位につき考ふるに  
我同においては外國における沿革  
と異り、労働者の團結は初めより

の自由を有すと考へられ、一法  
律の適用内」といふその法律につ  
いては、治安警察法中に規定する  
ものはたゞ單に  
**政社に** 關するものと一  
般團體に關し第八條(安寧秩序を  
保持するため必要なる場合におい  
ては内務大臣は結社の解散を命ず  
ることを得)の規定あるのみにし  
て、團結に關し何等の制限の規定  
なきものなり、しかして今日労働  
組合法を制定せんとする意見は、  
實際上白頭視せられたる労働者の  
團結を是認せんとするもの、即ち  
労働組合のいはゆる公認なるもの  
を現実化せんとするに外ならざる  
ものにして、ゆるむべきに於いて  
労働組合法と稱して、あるひは勞  
働者の團體は産業別または職業別  
によれるものに限るとか、あるひ  
はその團結に當りて政府の認可を  
要すとなすが如きは全く法の逆轉  
にして、今日労働組合法を制定せ  
んとする根本精神と相容れざるも  
のと考へらるゝなり

## 自然に育つた 組合四百余

その員数は廿余万人  
の如くその存在はこれを禁止せず  
單に法の  
公認したる團體として

緊迫し来れりとの誤解を  
**各国に** いたかしめ  
角日本が同條を締結ししを重  
みたりといふ好感を減却せしむ  
に至るのみならず、ついに内  
閣の攻撃により再び差別待遇  
あらためざるを得ざるの窮境に  
ちいらんことほとんど火を見る  
り明かなりと考へらる

一定の型を作らんとする第一の  
義は以上の如く種々の点より見  
ても、不適當なるを以て今日労働  
組合法を制定するには大体におい  
て現狀を現狀として規律するの外  
く、換言すれば従来主張せられ  
れる労働組合のいはゆる公認な  
ることは法律の形において宣言す  
べきものたるを可とすべきな  
あるひは

**法規も及  
團體も及  
公認**

**現狀を** 現狀として規  
するときは、従りに労働者が資  
家に対抗するの形勢を急激に増  
せしむるものなりといふも、勞  
働者の團結は産業別の状況及び  
労働者の團體意識の覺せいによる  
いわけゆる團體の實力によるもの  
して、たゞ二片の法を以て

田中  
田中  
田中

田中  
田中  
田中

田中  
田中  
田中

田中  
田中  
田中







